

---

# あゝ皇国の零

瑞鶴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あゝ皇国の零

### 【著者】

IZUMI

### 【作者名】

瑞鶴

### 【あらすじ】

「ゼロの使い魔」との一次元作品です。要塞化された名も無き島の守備隊が島」とハルケギニアに飛ばされてしまつ。

## プロローグ／主な登場人物（前書き）

最初にご警告いたします。

私はゼロの使い魔の原作を、一度も、読んだ事がございません、また軍事にもかなり詳しいといつわくではございませんねで変に思うこともあるとは思いますがその辺はどうかお許しあるお願いします。

あと海軍航空隊が主体です。

## プロローグ／主な登場人物

1943年夏／名前もないような島。

現地の日本軍はトラック諸島にある無名の島からトム島と読んでいた。

日本軍は油田と休憩基地の確保を狙い必ずこの島に連合軍が上陸してくると睨み

油田確保の為大規模な輸送作戦が行われかなりの戦力をトム島へ送った。

しかし連合軍は攻めてくる事なく1945年、8月15日を向かえる。

無駄な島に大量の戦力を送り込んでいたにすぎなかつた。

しかも戦争末期、トラック諸島と本土は完全に遮断されてしまい引き上げもできなかつた。

これも日本軍の敗因の一つだらう…

しかし15日の夜中、ピカッと閃光が一瞬島を飲み込む。

翌日、気がついたら島の隣に大陸があつた…

### 日本軍の戦力 -

日本軍はトム島を要塞化しておりかなりの兵がこの島にいた。もつともそのせいでも要塞を避けていた連合軍が上陸してこなかつたのかもしれない。

人間：

陸軍1万8千 海軍7千

計：25000

戦車・装甲車・その他車両：

九五式軽戦車12両、九七式中戦車8  
計：20両

艦艇：

戦艦2隻 巡洋艦3隻、駆逐艦5隻、空母1隻

計：11隻

航空機：

零戦（五二型が主力）120機 月光28機 九七艦攻27機 九

九艦爆5機 九六艦戦3機 九三中練30機

計：213機

隼65機 鍾馗15機 九九双輕20機 九七戦8機

計：108機

火砲：

13mm対戦車砲、105mm山砲ほか約200門

小銃5066挺  
軽機関銃200挺  
重機関銃58挺

食糧：自活可能

主な登場人物 -

「海軍」

濱口健介：

海軍少尉、25歳、今回の主人公で初陣は中国戦線で19歳の時、操縦士暦6年で珊瑚海海戦やガダルカナル攻防戦、敵の輸送船の妨害など

数々の戦いに参加したベテラン。

操縦技術は彼の乗った零戦は無敵と言われるほどの腕前であった。

総撃墜数87機

五十嵐次郎

海軍飛行兵曹長、25歳、健介とは同期であり戦友である。

普段は真面目だが実は真性の口リコン。

総撃墜数23機

野々村隆志

海軍大尉、健介達が所属する戦闘三 九飛行隊隊長。

総撃墜数53機

木下四郎

海軍中将、トム島に基地をおく第7艦隊司令官

「陸軍」

石原宗一郎

陸軍中将、トム島守備隊総司令官

当時の日本軍の中ではかわりもので古参の将校・士官達からは嫌われている。

辻吉宗

陸軍大佐、戦車隊隊長。

宗一郎の良き理解者。

その他…ゼロの使い魔の登場人物

日本兵など…

「話…アなんだよ…アアセ

「…」

朝だ

いつもと変わらぬ朝だ。  
もつとも日本は負けた。  
俺たちもしばらくなれば連合軍に捕らえられるんだろ？  
なんの為にこの島を要塞化したんだ軍は？  
結局連合軍は上陸してこなかつた。

外を見ると数百にも及ぶ航空機が並んでいた。

「濱口少尉」

声をかけてきたのは同期の五十嵐だ

「おひ、五十嵐か」

「さわやかな朝ですね」

「おひおい俺たちは同期だせ？ 前から言つてゐるナビ友達みたいな  
ものだ、  
敬語なんて堅苦しいぞ」

「いいえ、確かに同期で友みたいなものかもしませんが

やはり自分と濱口少尉は軍人であり階級があるのです

「それに自分は濱口少尉ほど戦果をあげてないですし、はやり濱口少尉は上官です」

「ハハッ そんなことはどうでもいいだる、まあ俺も上官には頭があがらないけどな」

「ようお前ら、今日は早起きだな、どうせもう戦いはないだらうだな」

後ろから声をかけてきたのは濱口達の所属する戦闘三 九飛行隊隊長野々村隆志大尉だ。

「日本人たるもの早寝早起きです、いつでも戦えるよつとりますね」

「つむ、上からは自衛目的ならば戦闘を行つてもよつとりますね」

朝飯も食い終わり訓練を行いつもおり日がすきていく。

濱口は自分の愛機、零式艦上戦闘機五一型を眺める。

「どうしました濱口少尉？」

「ん？ ああ、最近こいつに乗つて敵を落したことがないなと思つてな」

「まつたく、やつはこの島の油田も狙わず休憩することなかつていい島なのに

それすら狙わずにを考えてるんでしょうね」

当時連合軍は飛び石作戦を行っていた。

日本軍が要塞化した島を避け日本軍の戦力があまりなくかつ戦略上重要な場所のみを占領していく作戦でありこれにより本土との補給線が遮断された。だがこの島の守備隊はここに所ずっと戦闘を行つておらず武器、弾薬はあまりにあまり

さらに油田もあるので燃料にも困らなかつた。

そんな事を語つていると昼も過ぎ昼飯を食い終わった頃であった。偉そうな人たちが現れてきた。

一人は「トム島海軍航空隊」と呼ばれる戦闘289、戦闘299 戦闘309 戦闘319を

一まとめにした航空隊の司令官、関口史郎大佐ともう一人はトム島に基地をおく第7艦隊司令官木下四郎中将であった。

「はつ！ 関口大佐ではありますか！」

「やあ、ちょっと309飛行隊の皆さんに話があつてな、これは陸軍も海軍も巻き込んだ騒動だよ」

瀬戸内には理解できなかつた、関口大佐がいうにこれは島全体を巻き込んだ事態らしい。

その後、小走りで野々村大尉が現れる。

「…つむ、わかりました」

「全員集合――！」

全員が呼ばれそして309飛行隊全員が集まつた。

この事態を一番最初に発見した者に最初に話を聞いた木下中将が語りだした。

「私の部下が一番最初に気がついたんだがどうもこれはトラック諸島ではないらしい」

「…」

一同は黙つて話を聞く…

「なんでも我々の軍港から近くに大陸が見えるんだ」

皆半信半疑であつたが関口大佐の案で木下中将はそんな兵士達に信じてもらつ為

実際に軍港へ連れて行つた

「なつ…なんなんだこれは?」

「あれは確かに大陸だ!」これはトラック諸島じゃない!」

「どつどこなんだよ!」これは!」

皆驚きを隠せない。

無論濱口もある。

「どつなつているんだ?終戦と同時にこんなになつてしまつなんて

?」

「お前らー。もつやうそろ黙れー！」

関口大佐がちょっと力を入れて注意する。  
木下中将が続きを話す。

「実はまったく予兆がなかつたわけではない、  
先日の夜寝ようとしたら突然閃光が島を覆つたんだ、  
私はその後すぐ寝たし第一夜の海はよくみえないからその後どう  
なつたかは知らないが」

「おそらくこれがその結果であらうと思つんだ」  
「もう陸軍にも説明したある、我々はもしかすると神隠しにでもあ  
つたのであらう」

もちろんこんな事誰も信じられない、だが田の前の光景をみると信  
じざるをえなかつた。

その後陸軍の将校が一いつひりにせきてきました。

トム島守備隊総司令官兼第356師団師団長石原宗一郎中将

「こりゃあどうこいつですか海軍さん? ここはまだなんですか?」

「さあね、私にはわかりやしないですよ」

陸軍と海軍はとても仲が悪い事で有名だったが、これは概ね陸海軍  
の仲はよかつた。  
特に互いのトップはとても仲がよかつた、実はこの木下と石原は少  
年時代からの友人である。

「…ならば陸軍さんがあの大陸に上陸すればよいのでは?

見た感じ軍艦などは見られないですし米英が相手でなければ我々日本軍は最強ですよ」

「つむ、いいだろ？、上陸まで護衛を頼む」

「ただし上は自衛目的でしか戦つなと言つていた」

「それは心配ないでしょ？、この世界に國もくそもないと思つからね」

こうして陸軍を主体に大陸への上陸が図られた。  
その陸軍を護衛に名乗りをだしたのは関口大佐だった。

「いいですよ、航続距離の長い零戦部隊を送りましょ？」

さらに野々村大尉が名乗り出た

「その任務我々に任せてくれ下さい、我々の隊が一番零戦を持つていますし

パイロットもよく鍛えこまれています」

こうして日本軍には珍しい陸海軍共同の上陸作戦が行われた。

陸軍は歩兵を主力とした第109師団第一歩、第一兵連隊、戦車を主力とする第3戦車連隊を。

海軍は零戦を主力とした戦闘機隊を送り出し大規模な上陸作戦が行われた。

「よし、皆出撃だ！」

野々村は勢のいい声をだし部下に呼びかける。

零戦は栄エンジンの独特な音を出し次々と飛びたつていく。

一方の陸軍は揚陸艦を島の近くまで航海させる。

時は14時38分、大陸に上陸した。

「砲撃がないな」

「ああ、だが気をつけろよ…」

陸軍の予想では大規模な反撃にあうだらうとしていた、しかしながらもこなかつた。

一方の零戦隊も粗悪な無線で交信していた。

「濱口少尉、おかしいですね、戦闘機の迎撃がこないですね」

「ああ、それに地上を見る限りこの大陸にある国の軍隊も見られないと」

「俺たちは余裕で領空を侵犯しているといふの」

「ちょっと守りが手薄ですね」

「ここのまでも手薄だと逆に不安だな」

やがて、陸軍を見失つてしまつたのだった。

「やばいな、陸軍を見失つたぞ」

「野々村大尉、その辺は心配ないかと思います、翌日の朝陸軍は撤退する予定です」

「そつか、我々は燃料の事もあるから早めに退却しなければな」  
数分後、気がついたら戦闘309飛行隊はど「か村の上空を飛んでいた。

「野々村大尉、集落があります！」

「ん？ たしかに！ つてことはやはり人はいるのだ！」

「つてことは今頃陸軍は「」の軍隊と戦っているのでは？」

「いや、その可能性は低いだろ！」

「隊長！ 」<sup>1</sup> 2機、2時の方向に戦闘見られる…

「なんだと…？」

なんと村の近くでど「かの軍隊が戦っていた、それも近代的な戦闘ではなかつた。

「隊長！ 同じ方角に一機飛行機が飛んでいます！」

「敵か…？」

「いえつ！ 塗装から零式戦です！」

「戦つているのか…？」

「はい…あの動きは空中戦を行つてゐる模様です…」

「よつし、爆弾を投下し機体を軽くしあそいで戦っている友軍を助けるのだ！」

戦闘309飛行隊は村の近くの空中で戦っている零戦を助けに行つた。

しかしここからが長い戦いの始まりであった：

1-話…「なんだよ…」(後書き)

皆様方の「」感想をお待ちしております。

## 2話・タルフ村航空戦

その頃…零戦の搭乗員、平賀才人は

「クソツ！ 速いな！」

ブウウウウン

風竜の後ろにつき機銃を放とうとした時であった。

「弾切れ？」

才人の零戦は弾切れだった

風竜は後ろにつく！ 零戦が撃墜される危機であった。

「くつ…くそ！」

だがそのとき…

ブウウウウウウウウン

地上 -

「なんだの大群は！？」

「おおいあれは！？」

その存在は空中の才人、地上のルイズ達にも確認できた。一番驚いたのは影で見ていたシエスタだった。

「あれは？ 竜の羽衣？」

「なんであんな沢山？」

彼女の曾祖父は日本海軍の少尉である、そうなると時間があわなくなりおかしい話でもあるが。

ルイズや才人も驚いた。

空中 -

「嘘…だろ？」

ジヤン・ジャック・フランシス・ド・ワルド

「なぜあれが沢山！？」

地上 -

「なんで竜の羽衣が…」

アルビオン軍はさりに火竜を送り込んだ。

数は40、零戦の数は23、数だけなら倍ほどの戦力である。

「よし、我が隊は前方の雲に入つて逆落としをかける。

後方10機は爆弾をあの飛行物に投下する、行くぞ！」

ヒュウウウン

機体を軽くするため爆弾を投下、その爆弾が偶然アルビオン軍の陸上部隊に命中した。

零戦隊は雲に入り込みその後雲から姿を表す。

降下！野々村機が7・7mm機銃を放つ！

火竜を一匹撃墜した。  
続く濱口も。

(食らえ!)

ダダダ…

ブウウウン

零戦隊の奇襲は成功、一気に12匹を撃墜

その後も空中戦が行われる

ダダダ… ダダ… ダダダダダ…

ブオオオオ ダダダダダダ…

「竜」ときが20世紀の兵器にかなう筈もなく次々と撃墜されていく。  
野々村が最後の一匹を撃墜した同時に濱口は才人と戦う風竜を撃墜  
しようと  
背後へつく。

「こいつは速力に優れているらしい、ならば左旋回で格闘戦にもつ  
れ込もう」

ブオオオオオ

「なんだと! くそおー!」

「こいつはすばかり手早いらしい、なかなかすぐれた運動性  
能だ、

竜にしては感心だ」

そういうと濱口は7・7mm機銃を放つ、

ダダダ  
...

その頃アルビオン軍の戦艦は零戦隊のすさまじい攻撃をうけていた。木造であるためたちまち炎上し落ちていく……

「よし、全機帰還する。」

戦闘309飛行隊の活躍でタルブ村上空の制空権はトリステイン王国に戻る、

陸戦はルイズ達の活躍もあり勝利する。

一方の才人は日食の中に飛び込めず結局この世界にとどまるしかなくなる。

「バカッ！バカッ！バカッ！ どうするの！？」

「しかたないだろ」

チユ

「えつ？」

「これは再契約の証だからね」

「はあー？」

「（）主様の命令よ、あの沢山の竜の羽衣をおつてー。」

「でも燃料が足りるかな？」

「早くいいくのー。」

「…くいへい…」

数十分後、戦闘309飛行隊は基地へ帰還、全機が健在であった。その（）数分遅れで才人の零戦が基地上空を飛行する。

「すげえ、零戦が沢山だ…」

「なんでこんなに竜の羽衣が、形が違うのまであるー。」

形が違うもの…夜間戦闘機「月光」や九七艦攻、九九艦爆だらう。

「ど…とつあえず（）つちも零戦だし怪しまれない…よな？」

「私に聞くくなー。」

「うう…といあえず降つるぞ」

平賀機は着陸を試みる、既に海軍の整備員が待機しており滑走路も空けてあった。

「なかなか降りてこないな」

「瀬戸少尉、そこについては危険ですの」

「ああ、わかつた」

その後平賀機は着陸に成功、だが。

「なんだ貴様らー!？」

見た事もないような格好をしている男、そしてどうみても日本人じゃない女。

野々村大尉は少々警戒気味だった。

「おっ…おちついてください! 僕は日本人です!」

「なんだつてー!？」

「野々村大尉、少なくとも零戦に乗つてゐるところはさうではありますか?」

「…そうだな」

## 2話・タルフ村航空戦（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。

### 3話・ハルケニアという世界

「ああ、話を聞かせてもらおう、」

「はい、俺は平賀才人、日本からここに飛ばされてきました」

「お前もやはり日本人か！？」

「ええ、そうですが」

「なるほど…しかし我々とは姿が違う、内地でこのような服装をすれば大変なことになるが」

「俺は貴方たちから見れば今から60年以上も後の時代の日本人なんです」

「ちなみにこいつはルイズ、見ての通りこの世界の人だ」

「悪かったね…この世界の人で！」

「べつ別にそんなこと言つてないだろ？」

同じ世界、と言つても日本軍にとつて60年以上も後の時代から来たと言う平賀才人。

この世界で育つたというルイズ。

「そんな馬鹿な話があるのか？」

「ええ、ありますよ、現に俺も貴方たちもこの世界にいるじゃないですか」

「それで、」「なんだ？」

「ハルケギニアといつ世界です」

「ハルケギニアだつて？」

「聞いた事ないぞそんな地名」

「やはり俺たちは神隠しにでもあつたらしく」

「濱口少尉、いつたいこれは？」

「俺が知るわけないだろ？」

一同はなんだかよくわからなかつた。  
そんな非現実的な事つて起つることなのだらつかと。

「なるほど、よくはわからんが、俺たちは国に帰れないかもしれない  
こと言つことだな？」

「つてかほほ確實に帰れませんけど…」

（どうか…どう出征してから家族に顔を合わせることなかつたな）

（嘘だろ…？　国に帰れないだと…？  
俺は今までなんの為に戦つてきたんだ…？）

野々村にとつても濱口にとつても、そしてほかの日本兵にとつても  
国に帰れないことは  
かなりのショックであった。

司令官、関口大佐は彼らに戦争が終わったら生きて帰れと教えたか  
らだ。

そしてその大東亜戦争は終わりこれから帰れる…といひといひにこ  
れである。

「…といひで平賀つて奴、あの零戦は？」

濱口が才人に訊く

「あ、あれはこの世界にあつたんです、格納庫にしまつてあつたの  
を飛ばして…」

「そつか…まちがいないな、あのほかの零戦と違つて文字が塗られ  
てるあの塗装は

1年前病気になつて内地に送られた同期の佐々木武雄が乗つてい  
た機体だ」

「そ、そういうえば格納庫の前にそんな名前の人…そうだ…シエス  
タの曾祖父です！」

「曾祖父？ なにかが変だ、あいつがそんな歳なわけがないし  
第一あいつは今内地にいるはずだ」

「それにもしこにきてから爺になるまで暮らしてたとしたら俺た  
ちと

「時間があわない」

タツタツタ…

「誰だ！？」

足音に気がついた五十嵐飛曹長が怒鳴り上げる、  
つとあるいてきたのは禿げたオッサンだつた。  
才人はその人の名前を言う。

「こつ コルベール先生！？」

「なんでここがわかつたんですか！？」

「いやあ 竜の羽衣をおつかけてきたら偶然ここにひいてつでさつき  
の話を

聞いていたんだよ」

「竜の羽衣をお操りになられてる皆様、おそらくその佐々木という  
男は別次元から  
きたのでは、と私は予想します」

「だがそんな馬鹿げた話は…」

「ありますぞ、貴方たちは才人君の世界の人間だらうから当然魔  
法なんて  
ものはないと思いますから信じられないだけでしょう、  
この世界の何者かが、あるいはなんかの縁があつたのでしょうか」

「難しくてわからんぞ、とりあえず時間が狂つたことにしておくか

…」

たまたま出会つた日本人、平賀才人の話により少しこの世界に  
いてわかつたのであつた。

一方ハルケギニア大陸に上陸した陸軍は…

「な……なんじや」「いやあ……」

彼らが見たものは兵士の死体だ、それも死後数ヶ月がたつており蛆がわいていて、腐臭がひどかった。

「ガ……ガダルカナルの再現だ……」

「ちよつと違うだろ……」

第一歩兵連隊隊長関弘道大佐

「皆、気をつける、どうやらこの大陸にも軍隊はあるらしい」

「隊長、そろそろ引き返したほうが、戦車の燃料がなくなります」

「そうだな、だがあと10キロほどは問題ないし明日の朝までに帰還すれば問題はない筈だ」

「隊長！ 1時の方から謎の集団がこいつてきます！」

「なんだって！？」

「後方の第一歩兵連隊と第三戦車連隊に連絡しろ！ もしすると戦闘になるかも知れん！」

「はい！」

その後その集団はどんどんこちらに近づいてくる、やつてきたのはタルブ村から撤退してきたアルビオン軍の生き残り138名ほどだ。

装備は剣、弓と3つの大砲だ。

アルビオン軍と日本陸軍はたちまち遭遇、アルビオン地上戦隊の隊長と思われる人物と第一歩兵連隊長関大佐は互いにらみ合った。

### 3話・ハルケニアといつ世界（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。

## 4話・日本陸軍上陸部隊 vs アルビオン地上戦隊！

ひゅうつ

強いとも弱いとも言えない風が吹く。

両軍が互いを睨み合つ、まるで戦争前だ。

アルビオン側が先にしゃべりだした。

「貴様らはどこの軍隊だ？」と言え

「大日本帝國陸軍だ」

「大日本帝國陸軍だと？ 聞いた事もない軍隊だ、まさかトリステインの同盟国の軍隊か？」

「そもそも我々はトリステインがなんだかわからない、貴様らこそ何者だ？」

「私はアルビオン軍第七地上戦隊隊長レキコフだ」

「我々は先ほど貴様らと似たような軍隊の竜にほとんどやられた。我々は残ったわずかな兵だ」

「似たような軍隊の竜？ ハハツ どうやら海軍の奴ら派手にやつたらしいな」

「海軍？　といつことはやはり貴様ら奴らの仲間だな！」

アルビオン軍の兵士達は即座に戦闘体制に入った。

「我々は多くの兵士を失った、だが兵士達の士気はかわらないし  
おまけにお前たちの竜はすごくとも地上の戦力はすごくみえない  
「なんだその汚くて弱そうな軍服は？　それにその銃みたいなもの  
は？」

「でかいだけで使えないんじゃないか？」

「後ろの大砲も砲が小さすぎなのではないか？」

「それは俺たちに対しての挑戦状か？」

「そうだ、先ほどのかりをかえさせてもらひつ、我々は少数だが精銳  
である！  
我が軍は無敵だ！」

すると何人かの兵士が矢を放ち五本が日本兵に命中した！

「ぐあつ…」

「あああ、あ、　！！」

「大日本帝國万歳！－！」

「おかあちゃん！－！－！」

「うああああああああ、あ、－！－！」

「おい！　しつかりしろ－！－！」

「おのれ！－！」

「よし！　一気に五人を倒した、さうに進撃せよ！」

アルビオン軍は大砲を放つた、弾は後ろの九七式中戦車に命中した。

カアアアン！！

「なんだと！？ 弾を弾いた！」

「目標！ 敵の砲兵！」

「踏み潰せ！」

ガアアアアア

戦車が動き出す、

ガシャアアア！！！！

一門が破壊される、

「くそつ！ 撃て！ 集中砲火だ！」

だが残りの大砲も戦車に踏み潰されてしまつ。

「よし！ 今度は歩兵の攻撃だ！ 突撃い！」

突撃ラッパが鳴り響く

「つおおおおおおお！…………！」

ダダダダ…

バババハン…

タタ…タタタタタタ…

タンータン！ ダダダダダ…

「魔法だ！ 攻撃魔法で敵を攻撃する！ まずは大砲で壊せないあの動く大砲だ！」

レキコフ率いる数人は攻撃魔法のほかいろいろな魔法が使えた。しかし他の魔法も通じなかつた。

日本軍の戦車はほかの国のとくらべると貧弱なものであつた。しかし魔法に耐えるには十分な強度であつた。

「くそつ！ これでも食らえ！」

レキコフはゴーレムを召喚した歩兵にとつては脅威である。

「なんだあれは…！」

「バケモノだ…！」

「恐れることはない！ 戦車なら倒せるはずだ！」

「撃て！ 敵に穴をあけろ！ 徹甲弾を放て！」

ドゥン――――――

日本軍の戦車はほかの国との比べて攻撃力が低かった、それでもゴーレムを倒す程度ならなんら問題はなかった。

レキコフは続いて7対を召喚、しかし軽戦車、中戦車のどれも互角に戦えなかつた。

「……」

「撤退だ！」

ダツダツダツダツ――――――

アルビオン軍の残つた兵士達は次々と撤退していく。

「連隊長！ どうしますか？」

「深追いする必要はないだらう、それこそ我々は迷つて撤退ができるなくなる」

戦いは終わつた――――――

アルビオン軍側の戦死者は138名中131名、ほぼ全滅状態だ。また所持兵器のほとんどを失つた。

一方日本側の戦死者は僅か12名、負傷者20名、その負傷者も一週間すれば

まだ戦える程度の軽傷であつた。

勝敗は明らかであった、日本陸軍の圧勝である。

しかし日本軍はここにまた無駄な戦力をつかってしまった。

「連隊長、ほんとにいいのですか？ 奴らを逃がしたら奴らの国にこのことを知られて

しまいそのうち我々に戦争をしかけてくるかもしません」

「いや、その時はその時だ、あの程度ならたいして脅威にならないし無駄な戦力をつかいたくない、貴重な武器、弾薬が枯渇してしま「う

「そうですか…」

翌日、陸軍は大陸から撤退、ほとんどが生きて島に足を踏めたのであつた。

またこの時海軍の基地には一機の零戦が降りてきた。才人ヒルイズである。

「ほう君たちか

「あんた達、誰でもいいからちょっと来てよ  
女王様が呼んでるから」

「ちょっと… ヒルイズ、もっと頼み方がほかにあるだろー…」

「「うむむむ」… あんたは黙つてー…」

つまりはヒルイズの國の女王が日本軍に用があるらしい。

トリステインの女王はアンリエッタという人らしくこの前の戦いに参加し兵を率いて

立ち向かいその名聲を背景に女王に即位したらしい。

つといつても彼女は地上にいたため海軍のパイロット達が気がつくはずもない。

「なるほど、誰かこの才人君とルイズちゃんについていつてトリステインの女王様と

面会にいつてくれるものはいないか？」

つと野々村大尉は言うが

（自分で行けばいいのに…）

とほんどの日本兵は思つていた。

「ルイズちゃんかわいいしほかのもかわいいこいるかな…俺いつてみようかな！」

五十嵐飛曹長が名乗り出たが濱口はこれを止めた

「お前の場合手を出しそうで怖いから俺がかわりに行つてやる」

「濱口少尉ひどいですよ！」

「ロリコンはだまつてろ危なつかしくてつれてけないだろ」

「フツ オ人みたいな人だねあの五十嵐とかいう平民」

「俺はロリコンじゃない！！」

結局濱口少尉が行く事になる、

そう決ると彼は早速愛機に乗り込む。

（…なんていつたけど…俺みたいな士官の下つ端が国家元首と面会するのには

ちょっと緊張するぜ…）

「よし… 回せ…」

瀆口の掛け声で整備員達は始動用スターーターを回す。スターーターが充分回った事を確認しエンジンを掛ける。

「コンターック！！」

コンタックとは接続を表すコンタクトがなまつたものであり日本海軍独特のものである。

栄一一型エンジンの調子はとてもよい、この期待はちゃんとした整備兵が整備したもので戦争末期の学生が造り上げた期待ではないためスペックどおりの性能が出ている。

栄エンジンの独特的な音が滑走路に鳴り響く、一方平賀機もエンジンを掛け終えていて

いつでも離陸ができる状態となつた。

平賀機が横にならぶ、横にならんだ時瀆口は質問をした。

「ところで口クな兵器もないその国に滑走路はあるのか？」

「ええ、学園の方々が簡素なものだけど滑走路を造ってくれましたので」

「さうなんだよ、竜の羽衣ってホント不便だよね」

「竜の羽衣?」

「この世界での零戦の名前です」

「さうか、まあいいや、さうさういかなければならぬ?」

「さうですね、案内しますので後ろについてください」

栄エンジンの音が鳴り響く、一機の零戦は華麗に離陸していく大空へ舞う…

4話・日本陸軍上陸部隊 vs アルビオン地上戦隊ー（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。

## 5話・第一次タルブ村航空戦

ブオオオオオオオオ…

二機の零戦は快調に飛ぶ、特に才人の零戦は固定化の魔法がかけられている為

濱口の零戦よりも状態がよくより良好な性能を出していた。だが同じ機体であるゆえその差はあまりない。

「ねえ、才人」

「なんだ?」

「前々から気になつてたけどなんで竜の羽衣が沢山あるのよ?あれってひとつじゃないの?」

「あれはな、俺たちの世界での戦争に使つたための兵器だ沢山つくれたんだよ」

「ふうん、つてことは帰れるんじゃないの?」

「そりだらうけどもうそんな気はなくなつちました」

「ふうん、あんたなんていなくとも大丈夫なのに」

なんていつているがルイズは才人がいないと生活できなさそうである。

「そうだ、後で濱口さんたちの飛行機も固定化の魔法をかけてあげないとな」

「あんた魔法つかえたっけ?」

「俺は使えないけどな、その時は頼んだ」

「はあ? 私がやるわけないでしょ!」

一方濱口機は…

「暇だ…」

暇だつたらしい。

「まあ何時間も黙つて操縦したことなんて何回もあるけどな…」

それでも、暇なものは暇、なのが人間である。

そういふうちに村が見えてきた

数日前空中戦を行つた「タルブ村」だ

「長閑な風景だ、故郷を思い出す」

タルブ村の長閑をを見て濱口は故郷を思い出したらしく。

「…鬼追ひし…かの山…小鮎釣りし…」

「つづ…」

涙でそれ以上歌えなかつた…一度と帰れない故郷、一度と会えない家族。

そして一度と戻れない国を思い出すと涙がでてくるのであつた…

ドガアアアアン

「ん？」

気がつくと…タルブ村のどこの家が炎上しており上空には多数の竜がいた、

アルビオン軍がまた攻めてきたのだ。

どうしても補給上重要なタルブ村を占領したいらしい、制空権を手に入れるため

航空兵力のみで襲撃してきたのだつた。

濱口は粗悪な無線で平賀機にこう言つた…

「右前方2時の方向にアルビオン軍と思われる竜、数は23」

しかし才人の零戦はルイズを乗せるためいらない装備はすべてとつぱらつていた。

そのため無線で連絡を行うのは不可能であつた。

仕方なく急加速、横に並び手で合図する。

そしてようやく才人は気がついたのだった。

「あつ… まづい…」

「才人！」

「やるしかなさそつだ！ 弾はあそこの中で補給したからいっぱ

いある、

ルイズ！しつかりつかまつてろー。」

濱口はさらば手で合図する

俺についてこい とこう合図だ

濱口機から降下、旋回し敵に近づく、それに続く形で才人も近づく。

地上

「うわあーーー！」

「助けてくれーーー！」

「くそつー！ 軍はまだかーーー？」

民衆が騒ぐ、その中にいたシエスタも緊張している

（才人さん…）

何気に才人の事を気に入ってるシエスタは彼が、竜の羽衣、に乗つて敵を撃退してくれると信じていた。

するどい、

ブオオオオオオ

一度か聞いた音がこちらむかつてくる。

「あれ、竜の羽衣」

シエスタは笑つた、きっと才人に違ひないと思つた。

それは正解である、一機は才人の機体である。

わかの住民も零戦に気がつく。

「おお！ 竜の羽衣だ！」

「しかも二匹いる！」

「いいぞ！ いけえ！」

「今日は雲がないな……よし、敵の下を通過し敵の後ろに回り込み奇襲をかけよう」

ブウウウン

濱口が降下を始めそれに才人も続く、右旋回で後ろにつきフ・フミリ機銃を放つ。

ダダダ…

続く才人もフ・フミリを放つ。

ダダタ…

ダダダ…ダダ…ダダダ…

ブオオオオウン！

ダダ…ダダダダ…

彼らの勇猛果敢なる攻撃は華々しい戦果をあげる。

次々と竜を撃墜していく。

ブウウウウウウン！

竜は撤退していき残つたのは2匹となつた。

濱口得意の「一撃離脱」

ダダダ…

濱口は離脱していった、一方格闘戦を行つていた才人も最後の一匹を撃墜した。

「ありがとーーー！」

「トリステインもすてたものじゃないなーーー！」

「竜の羽衣は最強だーーー！」

「ふう…無駄な燃料と弾をつかつてしまつた

空中戦をすると通常より早く燃料を消費する。  
しかし今やトリステインでもガソリンを複製できるため補給上の面  
ではなんら  
問題はなかつた。

この先は当初の予定通り王都「トリスターニア」を目指すので道を知  
つている  
才人を前にいかせる。

しばらく飛ぶと「トリスター」が見えてきた。

「綺麗な町だ、京都とはまた違った美しさだ」

一機は城内に建設された滑走路へ着陸する。

## 5話・第一次タルフ村航空戦（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。

「すげえ…」

思わず口に口だすほどであった、濱口ことアヒルのよつた城に近づいたのは始めてである。

「ああ 入つて」

ルイズがちょっと冷たげに言つ

「すみませんね、あいつは魔法が使えない人にはつめたいんですね」

「はっはあ…」

そもそも濱口は魔法といつものが理解できなかつた。  
それはあたりまえである。

城に入るとそれはそれはとても広い、自宅の比にならないほどの規模だ、

「いらっしゃいです」

案内人が濱口を案内したどり着いた場所は個室だ。

ふわふわのカーペットに真ん中に立派なテーブルがありすわり心地のよさそうな

椅子があり一人が座るとちょうど向かい合ひよつた形であった。

どうやら大事な話らしくルイズと才人は去つていく…  
部屋には濱口だけが残された。

「…」

言葉も出なかつた

「これを日本が見たら怒るだろ? な…贅沢の塊だ」

ガチャ

ドアをあけたのはルイズだ、戻ってきたのか?

「あんた、女王様と会つのにそんな汚い格好でいいと思つてゐの?..」

「わかりきつていた、少々きつこ」とを言われる」とぐらり  
だが濱口も日本男児、流石にムツときた

「これは海軍の飛行服だ! 馬鹿にすると痛い目見るぞ!..」

「うつ…うるさい…」

ベシッ… ムチの痛烈な一撃が濱口に

「いついてえ…」

「今度言つと締め付けるからね馬鹿犬」

バタン!..

（なつ…なんだあいつ、荒鷺の心である飛行服が汚いだと？  
しかも犬呼ばわりだぞ？ ひどいやひどいや）

（あいつといつも一緒にいる日本人の気が知れん）

ガチャ、 今度は正面のドアが開いた、 すぐ美人だ。

「一人から話はきました、 貴方が濱口健介海軍少尉ですね」

「ええつ そうですけど」

「お一人からお話は聞いたと思います、 私がこの国の女王、 アンリ  
エッタ・ド・トリステイン  
という者でござります」

「よろしくお願ひします」

「えつ？ ああこち、 よろしくお願ひします」

「まずはですね、 貴方達日本軍の方々に感謝をしなければなりません  
ん、  
以前の戦いでタルブ村を守りきれたのも貴方達のおかげです。  
本当にありがとうございます」

「いえいえ、 たまたまここはどこだと偵察飛行を行っている所  
なにかどこかの軍が戦つてゐるよう見えてそこに我々が使用して  
いる戦闘機が

一機で戦つてゐるのを見てそれが理由で戦闘に参加しただけで

「ですが私の国を守つてくれたのにはかわりありません」

「あつ… ありがとうございます」

「さて、お礼を終えた所で本題に入りたいと思います」

「実はです、貴方達が竜の羽衣であつさり倒した軍隊は神聖アルビオン共和国と

「言う國のものです」

「元々あの国とは良好な関係でしたがアルビオン王族がレコン・キスタに滅ぼされ

そして今やこの国と戦闘状態なのです」

「それと、俺たち、なんの関係があるんですか?」

「私たちと一緒に戦つてほしいのです」

「いつ一緒にですか!?」

「ええつ 竜の羽衣はものすゞ」高空を飛行できてかつ攻撃力がかなり高い  
つて伝説ではそういわれてます」

「その伝説を信じて竜の羽衣で私たちの艦隊と一緒に戦つてほしい  
のです」

「俺はいいのですがこれは俺独断で決めれる事ではありません、  
トム島守備隊総司令官は俺ではないので…」

「だいいちアルビオンがどの程度上空にあるのかわからない、  
零式戦が飛んでいける高度なんですか?」

「ええ 多分です、地上3000メイルほどです」

メイルとは小説を書いている私もわからないのであるが  
恐らくメートルとかわりないと思う、だが濱口がそんなことを知るは

すもない

「メイル？ わからん、メートルか？ フィートか？」

「多分それくらいなら簡単にいけると思いますが… 石原隊長が許可してくれますかそれはわかりません」

「そうですか、別に無理とはいいませんが私は多くの犠牲者を出したくないのです」

「なので是非ものす！」<sup>11</sup>装備を備えている日本軍の皆さんと一緒に戦いたいのです」

「…

「…わかりました、この事は直接私がお話しておきますので、もうしばらくお持ください」

「ええいよご回答をお待ちしております」

そして

・

トム島守備隊総司令部

「…」<sup>12</sup>やはりつまり同盟し共に戦えということだな

「はつはつーー」

「…

瀬戸は必ずしも陸軍の人と話す時は緊張する。

この島の陸海軍は概ね仲がよいのだがそれでも日本軍自体陸軍と海軍の仲は悪い。

なんせ同じエンジンでも陸軍と海軍では呼び名が違う。

そして陸軍は個別に空母などの普通海軍しかもっていないような艦船をもつている。

それほど仲の悪い軍同士なのだ、たとえこの指揮官同士の仲がよくなても

陸軍の施設に入るだけで殺されるのではないかとすら思ってしまうのである。

「…」

石原も黙り込む、重大な、決断、の時である。

「これを拒否した場合…どうなると想いつ？」

「はっ！ 私にはサッパリで…」

「女王はいい人だったか？」

「はっ！ とてもやさしそうな人でしたが…」

「そうか…もしかすると拒否した場合戦争になるかもしけん」「そのトリステインとこう国と」

「えっ！？」

「パツと見優しい人とはどこか必ず裏がある、もちろん全員がそうであるとは思っていないが相手が国家元首となるとな」

「万が一全面戦争になつても勝てる自身はある」

「ただし我が軍は最大の問題を抱えている」

「、武器、弾薬の補給、が不可能なんだ…」

「…」

「わかるだろ、IJのあたりに生産工場などまつたくない」

「第一あつたとしても我が軍の為に製造してくれる工場などあるわけがない」

「私としては…戦いたくない、いつかはあるであろうIJの世界のどこの国との

全面戦争の為戦力を温存しておきたい」

「全面戦争ですか…？」

「ああ、私は予想するよ、近いうち必ず我が軍とどつかの国で全面戦争になる」

「一国でかつトリスティンのよつな小国ならなんとかなる」

「だが大きな国と戦争なんてやつてみる、弾が足りない」

「それと同盟を結ばれてもやばい、弾がたりなくなる」

「もし同盟軍と、あるいは大帝国との戦いになつた場合一ヶ月は何か事もなく

「暴れられるだらうが武器、弾薬が尽きて玉砕するのがオチだと私は思うんだ」

「…」

「生産工場があるなら話は別だがな…食糧も血活できるし油田もある…」

「くそつ… 弾さえあれば何年でも暴れられるところの…」

その時、濱口はある事に気がついた

「そういえば、あの平賀才人って男、日本人ですよね」

「ん？ ああたしかにそうだ」

「彼がいて我々がいて…みんな我々の世界からきた人ですよね？」

「そうだ、だからどうしたんだね？」

「つてことは我々のほかにも世界にきてしまった人はいるのでは？  
もしかしてその人は今の武器や弾薬、運がよければ戦車や戦闘機、  
戦艦とかまで

手にはいるかもしません！」

「たしかに、ありそうな話ではあるがそれを見つけるにはかなり手  
間がかかる上

結局は兵器だ、物が尽きて終わるだろ？」

「もしかして兵器を生産している工場もあるかもしません」  
「」の世界にやってきてから、造られた工場が

「…」

「…あるとは思えないが…いいだらう、ちょっと探してきてくれ」

「それに兵員をあつめるという点ではいいかも知れん、現に陸軍で  
は数名ほど

死者がでている、歩兵の補充が必要なんだ」

「わかりました、必ずやひとつは探し出してみます」

「それについて私も協力させてもらいたい、

海軍ばかり活躍させてそろそろ疲労も見え始める頃だ」

「いえ、俺は大丈夫です、」

「そうか、だが陸軍もなにかしなければならない」

「兵器探しは大変だ、一人でやるのも大変だ」

「そこで今回は陸軍の航空機で行つてもらひつ」

「えつ？ 陸軍のですか！？」

「ああ、軽爆撃機だがそれでも結構人は乗れる、  
航続距離も長いし丁度いいだろ？」

こつしてほかの場所ではありえない陸軍の好意で航空機と操縦士まで  
貸してもらつた、海軍からは濱口と巻き込んでやつたぜ五十嵐を、  
陸軍は操縦士赤松、を、また護衛として隼戦闘機2機を貸してくれ  
た。

戦力増強のため、陸海軍共同の兵器集め作戦が行われようとしてい  
た。

## 6話・女王との話（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。

小説の書き方を参考にしていた「ゼロ戦才人」に影響されたのか兵器集めになっちゃついましたがどうかお許しあ願いします、すぐに終わりますので。

あと、出してほしい兵器がありましたらリクエストしてください、もしかしたら登場するかもしれません。

ブオオオオオオオ…

1機の九九双軽、2機の隼戦闘機が飛行する。

九九式双発軽爆撃機とは1939年、試作機が初飛行し1940年正式採用された双発の軽爆撃機。

戦闘機並の速度と運動性能を誇り対ソ戦闘を意識して造られたものの大東亜戦争中南方戦線

にも派遣され戦争中全期間を通して使用された名機である。

一方の隼はキ-43として試作されるも九七式戦闘機に劣る性能だった為採用はされなかつた。

しかし開戦が避けられない状況となり遠隔地まで爆撃機を援護することが出来る

航続距離の長い戦闘機の需要が生じた、キ-44の配備も間に合わないことと飛行実験部実験隊長の今川一策大佐の推薦もあり急遽このキ-43を改良した期待が正式採用された。

皇紀2601年（西暦1941年）に採用されたとこにより「一式戦闘機」と名づけられる。

「隼」とはこの一式戦闘機の愛称である。

隼は実質終戦まで陸軍の主力であつた、操縦しにくいといつ評価をうけた重戦タイプの

「鍾馗」やエンジンに問題のある飛燕、エンジンの不調により本来の性能を出せない疾風。

そして登場が遅すぎた良戦闘機「五式戦闘機」…隼は陸軍が最も信頼できて

かつそれなりの性能を誇る戦闘機であった、連合軍も零戦より隼を恐れたという、

当時の日本の戦闘機としては零戦と並ぶ名機であろう。

今回隼は九九双軽の護衛のため共に飛行している。

九九双軽操縦士赤松曹長

「海軍さん、本当に俺たち以外に兵器を持ち込んだ奴らなんているんですかい？」

「ええ、現に俺たち以外にも日本人はいます」

「でもよ？ 流石に軍需工場ではないだろ？」

「多分ないでしょ？ ですが銃弾ぐらいは兵器と一緒に見つかるかもしれません」

「俺たちの兵器と規格があわなかつたらどうすんるんですかい？」

「その時はその時です」

「でもなあ…弾をみつけるのは苦労物ですぜ？ それにそつ簡単に地球の兵器が

転がつてるとはかぎらないし、あつたとしても日本刀だつたら使い物になりませんぜ？」

だが、赤松の不安はすぐに吹っ切れることになる、五十嵐飛曹長がなにかを発見した。

「赤松曹長！ 濱口少尉！ 航空機三機と5人が地上にいます！」

「本当か！？」

「はい、しかも相手はこちうに手を振つており滑走路をあけています」

「よし！ 着陸を試みよつ」

赤松は護衛戦闘機2機に着陸準備の合図を送る。

足を出しフラップを、着陸、ブレーキ、数一〇〇メートルを走行した後

三機は止まる。

機内から降りると確かに航空機が三機あつた。

「…戦闘機が一機、輸送機が一機か…」

「赤松さん！ 」こちらに五人がやつてきます…」

「！？ ドコの国の奴でしきうね」

歩いてきたのは ルフトヴァッフェLuftwaffe の服を来た外国人だ。

「ふう、よかつた、君たちは日本空軍の人たちですね」

ドイツ語訛りの日本語をしゃべりまた日本に空軍がないことも知らない様子だ

「我々はドイツ空軍のものです、見ての通りドイツ人です」

「さうか、俺たちは日本陸海軍航空隊の者です」

瀬口はちょっと田をそらし彼らの航空機を見てみると確かにドイツ軍の航空機だった。

写真で見た事があるくらいだが彼はこの航空機達がなんなのかを知つていた。

一機はメッサーシュミットのbf 109だ。

「ん？ どうしました？」

「いや！、いい飛行機だなと思いました」

「ああ、109のGタイプは最高だ、P-51とも戦える」

これはbf 109G-10といつタイプらしい  
そして残りの一機はユンカースのJU-52 大戦を通して活躍したドイツの輸送機だ。

そんなことを考へてビーディット空軍の将校が話し始めた。

「我々はゲリラとしてソ連と戦闘を行つていた。

ところが日本時間でいう8月15日の夜中に光に飲み込まれ気がついたらここにいたんだ」

「我々と同じ時間にここに来たつていうのですか！」

「ええ、そうです」

終戦の夜…なにかが起つた、それは日本だけではなく国際的なものだった…

…ということは味方のドイツならまだしも鬼畜米英や真つ赤なソビ

「エトモこの世界のどこかに  
いるかもしないということだ。

「わたくしで交渉である、濱口が味方にさそひむよしつ言つ

「あの…もしよければ我々と一緒に戦つていただけませんか?」

「ん?」

「我々は今約一ヶ月~二ヶ月の戦闘が可能ですがその弾もいすれは  
尽きてします、

そこでドイツ空軍の皆様と共に、油田もありますし機械に強いゲ  
ルマン民族の力なら

工場の建設も可能かもしませんし我々にとっても貴方方にとつ  
てもプラスになる話だと  
私は思うのですが…」

そつ言つとドイツ軍の人はこつこり笑いながら答えてくれた。

「ええ、いいですよ、5人で行動するより貴方達と行動したほうが  
安全に思いますし我々も補給線が絶たれて困っていたのです」

「それにドイツと日本は盟友です、是非共に戦いましょう」

「ありがとうございます!」

盟友といつともありあつそつ交渉は成立した。

また運がいいことに五人のうち3人は武器の製造ができた、工場さ  
え作れれば

生産が可能となる、石原の予想によると近いかもしないハルケギ  
ニアの国々との戦争、

それに備える為軍需工場と兵器生産能力は必要なかもしねない。

また輸送機の中は大量の武器、弾薬が詰め込まれていた。

ここから日本軍の基地までは僅か30キロといふこともあり航続距離の短いドイツの航空機でも充分行き来できる距離であった。

今回の兵器探しはこれで終了した。

だが翌日も兵器探しの仕事が待つている…

7話・場違いな工芸品【前編】（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております

翌日……ドイツ軍が仲間になつてから一日

ガチャ

「おお、貴方がドイツ空軍のディートリヒ・ケンペル少佐ですか」

「……とする貴方がこのトム島守備隊総司令官石原宗一郎中将ですね」

「うむ、しかし驚きました、まさか本当に我々以外にこの世界にきてしまつた者がいたとは」

「私もてつきり我々5人だけかと……」

「また赤松曹長たちを搜索にいかせた、なるべく多くの戦力を蓄えトリスティンと共闘することになつた場合予備兵力を沢山蓄えておかなければ

ならないからな、戦力温存の為に……」

一方九九双軽と隼2機は……

ブオオオオ……

「うーん、陸上兵器がほしいな」

「えつ？ なんですか？」

「ああ、我が軍は機甲戦力が欠けるんですよ、  
どこかに戦車とかでも転がってないですかねえ」

最初は兵器が落ちているワケがないと思っていた赤松だがドイツ軍のこともあり今では完全にあると信じている。

30分後…

「綺麗な湖だな…」

濱口が口に出すほど美しい湖はラグドリアン湖、ガリアとの国境付近に存在する

湖だ、現在その上空を飛行している。

現在日本軍はガリア側を飛行中、無論許可をとっているわけではなく領空侵犯であるが

彼らはそんな事を知る術もない。

一方五十嵐はここドルイズとデートしたい…なんて考えていた。  
顔はニヤニヤしている…ロリコン丸出しであった。  
だが彼は大発見をする。

「ん？ 濱口少尉！ 赤松曹長！ 湖畔に7台なにか車両があります！」

濱口は窓の外を見る

「ん？ 確かになにかある

「着陸は可能か？」

「整備された所がちょっとだけ離れた場所にあります、そこなら着陸は可能かと」

「よし、降りてみよ！」

「ブオオオオオオ…」

着陸後…

「では、しつかり見張つていてくれ」

「はい！」

隼の操縦士二名を見張りにし三人は早速謎の車両7台の所へ向かつ。数分ほど歩いた所にそれはあつた…だが迎え撃つ人間の手には銃や剣があつた。

「貴様ら…！ 何者だ…？」

赤松は訊かれると答えた。

「大日本帝國陸軍、飛行兵の赤松だ、右の二人は海軍の飛行兵だ」

「日本軍だと？ 何故日本軍がここに…！」

赤松は後ろを確認すると戦車が7台あった。

赤松は飛行兵であるためあまり戦車には詳しくないのだが大体わかつた。

アメリカ陸軍のM4中戦車「シャーマン」である。

M4中戦車は大戦中期頃からの米軍の主力であり性能こそあまりよくはないが

歐州戦線ではドイツのティーガーを相手に数で圧倒しティーガーを倒した。

太平洋戦線では日本軍の戦車を圧倒し最強の存在だった。

「…なるほど、お前たちも15日にか…」

「…とすればお前たちもか…」

「戦いが終わって…生きて祖国の土を踏めると思つたらこんな所に飛ばされて

しまうなんて…つくづくついてないな、俺も、日本の皆さんも…」

「俺たちはフイリピンで戦つていたんだが15日の夜だ、気がついたらここにいたんだ」

「さうか、俺たちは戦線の後方に孤立しちまった島の守備隊で同じ田に

島(いり)にきてしまった」

「島(いり)と…つてことは補給は可能か?」

「つむ、武器、弾薬の生産は今の所不可能だが燃料の補給は可能た  
食糧も自活できている」

「そりゃ、もはや日米の戦いは終わった、その島に我々を上陸させてくれ、

食糧と武器、弾薬が不足しているんだ、今後この地域での戦いもあるかもしれんし」

「軍が米軍の上陸を許すかはわからないが一応交渉してみよつ」

「ありがとう！私はアメリカ陸軍大佐、ジョン・ゲンガードだ、今後は日米友好の為、そして我々の自立の為共にがんばろう」

アメリカ軍戦車連隊隊長ジョン・ゲンガード大佐と数十人の軍人、M4中戦車7両を

入手した日本軍は直ちに島に戻り交渉を行つ。

「うへん、戦争も終わつた、そしてここは異世界だ、皇國の米国もない、この世界の奴らは魔法という変な技も使う」「敵味方は関係なしにこの島に入れるべきだろつ」

日本軍の兵士達も些細なことで戦つてゐる余裕はない事をわかつており

アメリカ軍の上陸を許可した。

3日後、ジョン大佐達が上陸、不思議な事に奇跡なのか日本軍との摩擦も特に起きなかつた。

日本軍の各部隊は島内戦闘を避けるため米兵に喧嘩をつむることを戒め始めた。

「アメ公と仲間になるとは思つてもいなかつた、  
氣はなのらないが同じ戦車乗りとして仲良くしろよお前たち」

「はいっ！」

戦闘309飛行隊隊長野々村隆志大尉

「ぐわぐわも何んへするよ」  
奴らを束縛するといふ意味で、倍返しでは済まされない

## 着々と戦力を蓄える日本軍

翌日の搜索では人はいなかつたものの九七式中戦車を3両  
その次の日には一式水上戦闘機を1機、  
さらに九六式陸攻2機と一式陸攻3機が発見された所で搜索は終了  
する。

その後数度にわたるトリステインの女王との談話は適当にやつておき、異世界にきてから1年がたつた。

石原総司令官の部屋に、ティートリビ・ケンペル少佐がやつてきた。

「司令官殿、工場の建設が終わり弾と兵器の生産ができるようになりました」

「本當か！？」

「ええ」

「ひとすれば補給上の悩みはなくなつた！」

「それはありません、工場は非常に小規模で町工場レベルです。大量生産は不可能で弾の使用を節約しなければ生産が間に合わず結局物資は尽きてしまいます」

「… そうか、だがなによりはマシだ、工場はケンペル少佐に任せよう」

「わかりました！」

一週間後、石原らを乗せた一式陸攻、それを護衛する濱口、五十嵐らが搭乗する零戦9機が王都「トリスターニア」を指す。

皆様方の「」感想をお待ちしております

## 9話・男の死はでかい

王都が見えてくる。  
・  
・  
・

学園の人、城の人、才人の為に作った滑走路に10機は着陸する。

「おお、竜の羽衣が沢山！」

「でもあのでつかい竜の羽衣みたいなのはなんだ？」

タツタツタツ…

今回のメンバーは石原宗一郎守備隊総司令官に加え海軍の木下四郎中将、濱口ゆ五十嵐、野々村といつた陸攻を護衛する戦闘機パイロット。上官一名の護衛を行う5名の陸軍兵士である。

「いらっしゃりで」「やれこます」

案内人が案内した場所は前に濱口とアンリエッタが話した場所ではなく会議室だった。  
…と行つても日本政府のものより立派であった。

向こうからもアンリエッタ女王と政府高官、アニエス率いるトリスティン銃士隊が

入室してきた、本日は日本人の姿はないらしい。

またルイズのお叱りもなかつた。

流石に将軍クラスの一人はそれなりの軍服を着用していた。

「直接お会いしたのははじめてだつたからし、はじめまして私ト  
リスティン王国女王  
アンリエッタ・ド・トリスティンと申します」

「うむ、私はトム島守備隊総司令官石原宗一郎で、」  
「すまむ

「第7艦隊司令官木下四郎です」

「よろしくおねがいしますね」

「えつーとあとはお会いしたことある人だけですね」

「お若いな」

「ええ、先代の王がなくなられてそれで」

「そうか…天皇陛下でもあることではある」

「では、早速本題に入りたいと思つ、

確かにトリスティン国は我が軍と同盟を結びアルビオンを制圧した  
いということでしたね」

「ええ、これ以上この国を攻撃されたくないませんし  
それは戦争の早期終結にも繋がります」

「ほかの国と組んだりどうですか?」

「いえ、私の軍には日本軍しか」「わざとせん」

「やうか…あいにく我が軍はあまり戦闘を続行できる力がないのです、

大規模な戦闘は避けたいのです」

「やうですか…どうしましょ?…」

アリンエッタが悩むと野々村が

「あの、ちよつとよろしくですか?」

「えつ?ああいいわ」

民族

「アルビオンって國は上空にあるんですよね?」

「やうです」

「なら俺たち戦闘309飛行隊に任せてくれさー!」

「しかし君の部隊はこれまでの戦闘でつかれきつてるのでは?…?」

「いえ、大丈夫です! 士気は皆同じです!…!」

「…やうか…では309飛行隊のみんなにはがんばつてもらお?…」

「ついでトロステイン軍と日本軍は軍事同盟を結び共にアルビオンの撃滅を

図ることとなつた。

だが事件はおきた、基地に帰還する時であった。

攻撃機1機、戦闘機9機は離陸しすでに王都から離れようとした所であつた。

正面から航空戦艦1隻、竜數十匹が飛来、

「正面から戦艦一隻！ 竜數十匹！」

「ここなん所にくるなんてなんだあれば？」

すると戦艦が大砲を放つて来た

「くそお…奴ら俺たちの敵らしきぜ！」

「間違いない！ あればアルビオン軍です！」

「なんだと？ 奴らは俺たちを完全に敵だと思つてゐりしかな

「敵は戦艦に乗つてゐる、砲火に気をつけながら敵竜騎士を撃滅せよー！」

「それと同時に敵から司令官機を護衛しろー！」

一方地上、トリスターー亞の住民達は

「敵だあああーー！」

「アルビオンが攻めてきやがつた！…」

「見ろ！ 竜の羽衣がたくさんいるぞ…」

「くそおー… がんばれよ竜の羽衣！…」

ブオオオオ！

ダダダ…

いつものように日本軍はアルビオン軍を圧倒する。

ダダダ… ブオオオ

ダダダ…

ダダダ…

「敵が多い、おまけに敵の砲火が俺たちを狙つてやがる」

「こんな戦闘は久々だ」

ダダダ…  
ダダタ…

その時！ 一発の艦砲が一機に命中！ 野々村機だ  
いくら威力がないとはいえ同時期の戦闘機からみれば紙程度でしか  
ない

零戦の強度では耐えられなかつた… 弾は翼に命中し野々村の零戦は  
炎上する…

それにいち早くがついた濱口少尉

「あつ！ 隊長！！」

ほかの隊員も気がつく、

「隊長！……」

「野々村大尉！」

だが野々村の生還はほぼ不可能。

野々村は心にこいつ思つのみであった。

（生きて帰れ、生きて帰るんだぞ！－！

それが、トム島魂だ！－！）

燃え上がる零戦は敵艦に体当たりを行つた

海軍大尉…野々村隆志 異界上空に眠る…

享年31歳…

その後木造の戦艦は火が燃え上がり數十分後陸に落ちる…  
乗組員達はトリステインの捕虜となつた。

またこの戦いで始めて零戦を損失した…戦争中53機を撃墜した撃墜王も悲惨な最期を

向かえた…

だが野々村は生きていた…

その不屈の闘志は…隊員達の心の中で生きていた…

## 9話・男の死はでかい（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております  
あと野々村大尉の「」冥福をお祈りします。

## 10話・アルビオン上陸作戦

トム島海軍航空隊総司令官濱口四郎大佐

「… そつか… 憐しい男を亡くしたな…」

無念にも艦砲射撃が命中、燃え上がる零戦で敵艦に突撃に亡くなつ

た戦闘三 九飛行隊隊長

野々村大尉… 彼の活躍で敵の戦艦は落ちた… 彼は二階級特進により中佐となる…

「… なあ濱口」

「はい…」

「彼がいなくなつた309飛行隊は誰が指揮できる?」

「えつ?」

「濱口、お前は隊長になるに等しい人材だ」

「腕も、中身も、すべてがな」

「頼めるか濱口? お前が戦闘309飛行隊の隊長になつてくれ」

「はつ… はい! 喜んでその任、お受けいたします…!」

こうして濱口少尉が亡き野々村の後を継ぎ戦闘三 九飛行隊の隊長に着任する。

またこれまでの戦果が認められ中尉に昇進した。

当初から人気であった瀬戸が後を継いだ事は皆から喜ばれた。

「よしー 本日の訓練は「これにて終了する。」

「はいっー。」

「明日は実戦だ、皆よく休むんだぞ」

「はいっー。」

「では本日はこれにて解散!」

「瀬戸少……いえ中尉、どうでしたか?」

「以外と疲れるな……隊長は大変だ」

「いいですね、俺なんか今だに曹長ですか?」

「日本軍は厳しいからな」

「明日はよしよし実戦ですね」

「本来なら焼け跡から立て直した家で「ロロロロ」といただらうにな。  
・・今頃」

「…」

濱口にとつて 昇進などあまりうれしい」とではなかつた  
それより故郷に帰りたかったのだ…夜…

「おやすみなさい」

「なあ五十嵐い お前は戦争好きか?」

「えつ? あつはにお国のみなら!」

「俺は検閲なんてしないぜ、気軽にいいな」

「えつ?」

「当の俺があまり好きではない」

「軍人なんてほとんどそんなもんだ、 愛国心から軍に入隊しても  
実戦となつて戦いが長期化すると嫌になる」

「俺は今まさにそれなんだ、 しばらく故郷で家族と一緒に休みたい」

「…」

「つらいんだ、一度と愛する者に会えない事や愛する土地に足を踏  
み入れられないことが」

「夢なら覚めてほしい、 日本は負けてしまったが故郷に帰れるだけ  
でうれしい。」

「でもいきなりこんな神隠しにあつて…」

「今頃どうしてるんだろうなあ…お袋や弟に妹達は…」

「アメリカのやうににかされてなければいいけど…」

・

「明日は早いし、寝るぞ五十嵐」

「あつ はー!」

翌日…

ブオオオオオ…

309飛の零戦22機、九六陸攻1機 一式陸攻1機 九七艦攻1  
0機、陸軍第120飛行戦隊の  
隼18機、九九双軽15機、ドイツ軍のbf109G、さらに当初  
は航空兵力のみと

言っていたのだがそれは流石に難しいということになり陸軍を落下  
傘部隊として

上陸をることを決定、輸送機2機とトリステインのレドウタブー  
ル号、ヴュセンタール号、

さらに才人の零戦を研究して新造された東方号などの艦船がアルビ  
オンへ飛行中であった。

濱口機の後ろに突然零戦がやってきた、どうやら才人は零戦で戦う  
らしい。

いつも思つことだが乗つてゐるだけでたいして役にたたないルイズを  
何で

乗せているのだろうか？ だがそんなことはどうでもよかつた。

ちなみに輸送機だけでは兵員を運びきれないでトリスティンに頼み日本兵のほとんどは

トリスティン艦船に乗り込んでいる。

また東方号には第三戦車連隊の戦車や日本製の高性能火砲が積まれている。

ブオオオ…

「あいつは平賀才人っと言つたか、あいつもこの戦いに参加するらしいな」

「濱口隊長！ 右前方11の方向に敵艦！」

「よし！ 艦上攻撃隊に攻撃命令を下す！ 敵艦を攻撃せよ…」

空中のため航空魚雷は意味がない、そのため攻撃機には魚雷のかわりに数発の爆弾が搭載されている。

敵の艦砲射撃が航空機を狙う。

しかしながらあたらない、

木造艦の為一発でも爆弾を命中させれば炎につつまれ撃墜が可能であつた。

アルビオン上陸までに敵の軍艦を多数撃墜。

日本軍は戦闘可能な艦艇数は10隻まで減らすことに成功した。

…一方陸軍とトリステイン軍は…

「敵が上陸してくるぞ…！」

「迎え撃て…！」

落下傘部隊は全員が着地することはできなかつた。

日本軍の参加兵力1200名のうち89名が上陸前に死亡、トリステインも大きな損害をうけた、しかしほとんどの兵士が無傷で上陸に成功、また火砲や戦車も無傷で上陸に成功した。

ダダダ・・・

ダダダ…

ドゥン…!!

「ぐあああ…！」

「あああ…!!…!!」

「うああああ…!!…!!」

「突撃い…!!」

「砲を撃て…！」

ドゥン…!! カアアン

「くそつ！弾かれた！」

「戦車隊は歩兵を援護しろ！ 中戦車2台は敵の砲兵を倒せ！」

ガアア…

「踏み潰せ！！」

ガシャアアア…

ダダダ…ダダダダダ…

・

守備隊総司令部 -

・

「閣下、アルビオンの軍港を占領したとの電報が入りました！  
航空機が着陸できるスペースもあります」

「そうか！ やつたか！」

（結局…航空兵力だけの戦いではなくなったが…どうやら我が軍の  
損害も

少ないらしい…よかつた…）

こつして戦闘309飛行隊が主となつた攻撃で敵の空軍力を削ることに成功し

また敵の軍港がある「ロサイス」を占領、國同士の正式な戦いで戦

いで久々に勝利する

ことができた日本軍はさうに軍を奥に進めアルビオン攻略を図った

一方トリステイン・

「女王様、私たちまったく活躍してませんね」

「それだけ日本軍が強いらしいですね」

## 10話・アルビオン上陸作戦（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております

## 11話・アルビオン突進作戦

1946年3月10日… 本日は陸軍記念日である

アルビオン上陸部隊の指揮についたのは石原の參謀である平岸少将であった。

「我が軍は上陸、ロサイスの占領に成功した」

「しかしこれだけでアルビオン軍は降伏するはずがない」

「そこで我が軍は王城を陥落させるかアルビオンが降伏するまで戦闘を行うことにする」

「まず、アルビオンの王都、ロンティニウムまで行くのだがこの作戦には3つの

問題点がある」

「ひとつは非常に広いことだ、皆もわかるであろう、長いだけに補給線が伸びきってしまうのだ」

「ふたつめはシティオブサウスゴータという大都市を突破しなければならない、

ここでの突破には相当苦労するだろう、兵力も多い」

「最後の問題点は王都までの道のりまでに敵陣が多すぎる」とだ、いくら敵の装備が貧弱とはいえ、1200名の我々からみれば何十倍、いや何百倍かも

しれない兵がいる」

「普通の攻め方では2ヶ月起つても墮ちない」

「物資もない、急がねばならん」

「進軍したら一歩も引かず突進だ。戦闘部隊はただ敵中を突破せよ！」

後を振り向くな！ 残る敵は後続の部隊にまかせろ！ 突進、突進、真っ直ぐ

ロンディニウムを目標して突進だ！」

平岸は山下がマレーで行つた突進作戦を決行することとした。

突進作戦とは文字通り一歩も引かずひたすら前進するものでありこの作戦で山下は

マレーを短期間で日本のものにすることに成功した。

このアルビオン攻略作戦は海軍から次第に陸軍が主体となつていつた。

緒戦の海軍の活躍も中盤になつてくると出撃回数が減つてきたのだった。

一方のトリステインは慎重な行動をとることになった。

こうして翌日、両軍によるアルビオン占領競争が開始された。

3月11日午後9時…

タツタツタツ…

ガアアア…

歩兵と戦車が一いつそり、一いつそりと敵陣に近づく、

日本軍得意の夜襲である。

「…攻撃開始！」

「…」  
「ドゥン！…！」

「バババババ…」

「ダアアアン！…！」

「敵襲！…！」

「ババババ…」

「ダダタダ…」

「ドオン！…！」

「ダダ…ダダダダ…！」

「おのれ…騎兵隊よ行け！」

「うわああああ…！」

「ドオウン！…！」

「うわあああ…！」

「ダダダ…ダダダダ…」

第一の敵陣はかなり大きな物であつたが1時間もしないで突破した。  
戦死者は3名、負傷者は5名である。

3月13日、「キーレル」を占領  
続く3月15日「レコー」を占領。

3月18日「ミスター」占領していった。  
非常に長いサウスゴータであるが3月末までに夜襲を繰り返し約半分を占領した。

だが戦闘が長引くにつれて次第に兵力を落していくのであった。  
1200名いた兵士も824人まで減る。

「ああ、明日は何人生き残るんだ?」

「そもそもこの戦いは勝てる戦いなのか?」

「さあな、この先は敵の大要塞シティオブサウスゴータがある、  
そこで多分100人くらいまた死ぬだろう」

「むしろ今までの戦死者が少なかつたのが奇跡だぜ」

「まったく平岸少将はいくらなんでも敵をなめすぎだ  
装備がいいからって兵士を酷使すると疲れきって行動不可能にな  
るぞ」

「マレーにいた兵士はレベルが高かったんだろうが俺たちは実戦に  
参加したことが  
ないんだぞ?」

「やれやれ、俺たちは生きて帰れるのかな?」

その頃口サイスに滑走路を建設した日本陸軍はこの戦いにおいて最も日本軍を苦しめた

竜騎士対策として隼50機、鍾馗8機、しまいには旧式の九七戦8機まで配備した。

さらに地上支援の為九九双軽10機が配備された。

これらがあつまつた航空隊を「特設第一飛行戦隊」と日本軍は名づけた。

配備された翌日から航空機の運用が始まりまた後続部隊1000名とアメリカ軍戦車連隊のシャーマン7両が追いつき日本軍の進撃はさらに加速、シティオブサウスゴータまで1日で到着した…そして

4月2日…

タタタタ…

タタタ…

シティオブサウスゴータ守備隊エールトス大佐

「…」

ガアアア…

・・・・・

「今だ！ 攻撃開始！」

パン！

火縄銃だろうか、アルビオン軍が発砲したきた。

ダダダ…

ダダタ…

「日本軍の進攻を止めるのだ！」のシティオブサウスゴータで…」

ダダダ…タダダダダ…

ドウン！！　ドウン！！

ガアアア…

シティオブサウスゴータ、ここで始めてアルビオン陸軍は日本軍に  
対し組織的な  
反撃を行つた。

ダダダ…

ダダダ…

バーン！　タタタ…

ドオウン！！！

シティオブサウスゴータは日本軍にとつても、アルビオン軍にとつ  
ても戦略上

重要な拠点である、そのシティオブサウスゴータを死守すべくアル  
ビオン陸軍の

エールトス大佐は決死の反撃を行う。

新たに配備した竜騎士18を配備、装備は貧弱でも最初から制空権をもつていた事、

日本軍の空港が離れていたことにより航空機の到着が遅れたこと、シティオブサウスゴータの市街地をうまく利用した戦法をとったことで

明らかに実力の違う日本軍にアルビオン軍は善戦していた。

日本陸軍にとつてもハルケギニアにきてからこれほどの苦戦は経験したことがない、

後援部隊をあわせて約1800名がいたのだが1430名まで減つてしまつた。

しかし

ブオオオオオ！――！

ヒュウウウウ　ドゴオオオオン！――！

バババ

ダダダダダ

航空機による支援が行われるよつになつた。

また次第に冷静さを取り戻した日本軍は反撃に転じた。

4月9日、一週間にわたるシティオブサウスゴータの戦いは日本軍の勝利に終わつた。

この戦いで両軍に大きな損害をもたらした。

だがアルビオンにはもう戦う力がなかつた：

予備兵力の多半を使い果たし抵抗できる戦力などもうなかつた。

4月10日より再び進撃が開始されまたこの頃になるとトリスティンとの一番乗り競争も

始まつていた。

「ん？」

敬礼をする

「君達はどこの部隊だね？」

この部隊の隊長はアンリエッタの指名でルイズだった

「アンタ平民の癖に調子のりすぎなんだよ、

一応答えるけど」

「ちょつ ルイズ失礼だろ！」

「俺たちはトリステイン第三師団です」

「そつか、残念だったね、私の部隊はさつきここを通過したよ

「なつ…なんですって…」

「おやかつたあ…」

4月12日サウスバークを突破

4月15日にはロンティニウムを陥落させアルビオン軍は降伏した。

その後アルビオンはロサイス側を日本が、ロンティーネウム側をトリステインがシティオブサウスゴータをさかえに占領した。

1ヶ月半に及ぶアルビオン攻略は日本軍、トリステイン共に多くの損害をもたらした。

日本軍は約800名が、トリステインは5800名の兵士が亡くなつた。

日本軍の死者のほとんどがシティオブサウスゴータの戦いで戦死者である。

この戦いでいかに劣勢のアルビオン軍がすごい戦術で戦つたかが伺える。

だがこの戦いではアルビオンが負けた、己の無力さに気がつかず勝手に國をかえ  
自分で戦争をおこししかも負けたという…

だが日本軍の戦いはまだ終わつたわけではない、新たな脅威が待つてゐるのだった

## 11話・アルビオン突進作戦（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております  
山下は私も大好きな軍人です

## 12話・赤とんぼ

アルビオン戦争から戦後2週間がたつた。

一方軍需工場では零戦52型が一機製造された。

これは損失した零戦を補う為のものである。

しかし零戦を操縦できる人間がほかにいなかつた。

「…パイロットがほしい」

「折角一機零戦ができあがつたというのにパイロットがほしい！」

…というわけで濱口はパイロットを補充するため宣伝ビラを撒いた  
神聖アルビオンを倒し一躍有名にした日本軍に入りたいと思つ平民はたくさんいた。  
そのため応募は殺到しそのなかから3名、厳しい適正検査を行い選出する。

こうして選出されたのは…

トリステイン国籍のハー・ボット（18歳）

ガリア国籍のブルッシク（17歳）

ゲルマニア国籍のシュタイナー（19歳）

この3人である、いずれも20歳未満の未成年であるがそれが濱口にとつて

でつかい希望であった。

「皆、よく志願してここまで来た、だが訓練はとても厳しいものだ、覚悟はできてるな？」

「はい！…！」

三人の若鷲達は元氣よく返事をした。

訓練は基礎体力をつけることから始まった。

「空中戦を行うと相当のGがかかる。そのGに耐える為体力、そして精神力が必要だ！」

濱口にとつてははじめての教官という役目である。自分がそつであつたように若鷲達には厳しく指導する。

午後、勉強

「軍人は体力だけあつてもつとまらない、特に飛行兵は操縦の仕方を学ばなければならぬ、勉学もできること一人前なのだ」

「はい！…！」

どんなに苦しい訓練でも、どんなに厳しい訓練でも、若鷲達は耐えた。

ハルケギニア出身の若鷺達はとても飲み込みが早かつた。5月の末頃には体力さえあれば操縦できるほどであった。

6月1日、本日は濱口26歳の誕生日である。その日に若鷺達の初飛行が行われる。

若鷲達が乗る機体は九三式中間練習機、赤トンボの愛称で親しまれるこの機体は日本の名練習機であつた。戦争末期にはこの飛行機で特攻に行かれた若鷲もいた。

「よし！ 三機とも回せ！」

整備兵はスターターを回しスターターが充分回った事を確認しエンジンを掛ける。

## 「コンターック！」

この訛りは永遠に直ることはないだろう、  
教官の濱口がそう覚えていたからだ。

ブロ...ブロロロロロ...

回転数の低い引っ越し用エンジン音が鳴り響く。

「よし！ 異陸を開始しろ！」

「はい！！」

こうして若鷺達は始めて飛行機で大空を飛ぶ…  
若鷺たちは離陸を開始した…

### 若鷺の歌

若い血潮の予科練の  
七つ釦は桜に錨  
今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや  
でかい希望の雲が湧く…

プロロロ…

練習機とは大抵後部席に教官が座っている、  
もちろん彼らにも教官はいた、五十嵐飛曹長などが後ろに乗り込んでいる。

3機の九三中練と後ろからそれを追い上げるもう一機の九三中練、  
濱口だ、

彼はこの日は若鷺達の勇姿を見たかったのだ。

軍港付近を通過しここからちょっとと行って急旋回を行い着陸するの  
が本日のメニューだ。

現在その軍港を通過中である。

濱口を除く最もベテランの教官である五十嵐、彼が担当するのはガ  
リア国籍のブルッщик、

彼は最年少だが3人中もつとも操縦士として優れているといつ。

「なあブルッシク！ どうだ始めての飛行は！？」

「はい！ 最初は緊張しておりました！ しかし今はちゅうと楽しいあります！」

「そうだろ！ まあ緊張は永遠になからうないだろうけどなー！」

「はー！ いつ何がおこるかわからないのが航空機です！」

だが彼らの訓練は終わらうとしていた、そして実戦に入らうとしていた…

皆様方の「」感想をお待ちしております  
ちなみに九三中練は零戦より  
お気に入りだつたりします。

## 13話・突然の戦争

「オオオオ…」

4機の赤トンボが基地へ帰還すべく旋回を開始しようとした時であった。

横から多数の点が「ひらひら」飛んでくるのだ。

「」の九三式中間練習機は現地改造で粗悪だが無線がとりつけられていた。

先頭のブルッシク機の教官五十嵐が無線で他機へ連絡する。

「」からブルッシク機の五十嵐、3時の方向から謎の飛来物体がこちらに来る」

「なんだと？陸軍じゃないのか？」

「いえ…ひとつは飛行機に見えますが…」

「よし、全機に告ぐ、3時の方向の飛来物体を確認する、私についてこ」

「」と濱口は前に出て右旋回を開始した。

ちょっと時がたつとその飛来物はなんなのかがハツキリした。

「あれは…ガリアヘ一機あげた赤トンボ！？」

「後ろには竜が！追尾されてるのか？」

そう、5ヶ月前、研究の為ガリア王国へ製造年数が一番古い九三式中間練習機をあげたのだ。

その九三中練には日の丸ではなくガリアの国旗が描かれていた。

「！？ あの赤トンボやはり攻撃されている！」

ガリアの赤トンボを狙うのはアルビオンの戦いが終わってからすぐ各国で戦力が強化された

竜騎士団だ。

「あつ！ なぜた！？ トリスティンの竜騎士もいやがる！」

「あちらはゲルマニア、ロマリアの奴らまでいやがる！」

一体なにが起こったのか？

そりゃ…

ドゴアアアン！…！

「なんだ！」

「あつ…」

「ハー・ボット機が撃墜された！」

どうやら瀬戸たちの世界の兵器を狙っているのか？

単にガリアの同盟国とまちがえたのか？

そもそも何故ガリアと二国は戦っているのか？

幸いな事にハーボットらはパラシユートを装備していた為生還した。

「待つてろよ！ 後で必ず助けにいくからな…！」

「濱口中尉！ 後ろに敵がついてきます！」

「振り切れ！」

「ダメです！ 敵には風竜もいます！ 低速な赤トンボでは振り切れません！」

「くそつ！ 戰闘命令を下す！」

流石に近くもハルケギニアにいればいろいろと詳しくなっていた。だがそんなことはどうでもよかつた。

濱口達は自衛戦闘に移ることにした。

「俺は後ろの敵を相手する。残りの一機はガリアの赤トンボを助けろ！」

「了解！」

濱口機が降下、左旋回で敵の後ろにつけとする。

一方残りの2機はそのまま敵の竜騎士隊へと向かって行つた。

ダダダ… ダダダ…

旧式の赤トンボを巧みに操り敵の竜騎士を撃墜していく濱口。一方その頃

「五十嵐教官！ どうすれば…！」

「高度を下げる！ 」の位置での上昇は自殺行為だ！

「はいっ！」

「オオオオオオオオ

「敵が後ろにつこうとしています！」

「敵は左に旋回する！ 一二三四五右旋回だ！」

五十嵐の指示どおり操縦するブルッシク、うまく交差し敵の後ろについた。

「今だ！ 機銃を発射しろ！」

ダダダダダダ… ダダダダ…

「落しました！」

「よし！ 一機撃墜だ！」

「あつ！ 私の国の赤トンボが狙われてます！ 一！」

「距離が遠い！ 援護射撃だ！」

「はい！」

ダダダダ…

トリステインの竜騎士は被弾を恐れ追尾をあきらめた。  
続いてゲルマニア、ロマリアもあきらめていった。

「ん？ 下も、急降下で機銃を撃て！」

「はい！！」

ブオオオオオオ  
：

ダダダダ...

やじ撲した!」

「そのまま流すように右に旋回し2時の方向にいる敵にも機銃を撃て！」

ダダダ  
ダダダ  
ダダダ

「よしつ！ 初陣で3匹撃墜か！ お前はいい操縦士になりそうだ！」

「ありがとうございます！」

「だが油断はするな！　まだ戦いは終わってないぞ！」

「はい！」  
「あつ！」  
「あれ！」

ん?

五十嵐が横をふり向くと田に立つたのは木つ端を撒き散らしフラン  
飛行するガリアの赤トンボだった。

「くそつ！ 奴はやられた！」

ガリアの赤トンボに攻撃を仕掛けた竜騎士の後に濱口が、  
「大和魂を見せてやる！」

ダダダダダダダ…

2匹いっぺんに撃墜した。

10分後…連合竜騎士団は撤退を開始した。  
無事基地に帰れたのは濱口機とブルツシク機のみであつた  
シュタイナー機は大勢の敵の集中砲火をうけ蓄戦空しく撃墜されて  
しまった。

濱口のほうに軍医があるじてきた

「先ほど海軍の船乗りさんがハーボットさんと柳沢さんを運んでき  
てくれました

二人とも軽症です」

「よかつた…もう助けられたのか…」

落ち着いた濱口に軍医はもう一言言つ

「そうそう、さつきここに飛行機が不時着してきました、

ガリア国籍の人でしたがなにがあつたのですか?」

「さあ、わからんな、その人に話をきかないと」

「まあ彼女もたいした怪我はしませんので」

「ん? 女性なのか?」

「ええ」

「なるほど、といつあえず事情を聞きたい」

「今彼女は寝ておられます」

「そりが、では起きたら教えてくれ、俺も一眠りする」

タツタツタツ…

濱口がブルッシクと五十嵐に近寄る。

「本日は」苦労だった、五十嵐、お前の指導がよかつたんだな

「いえいえ自分は濱口中尉には足元にも」

「まあ、俺もお前もベテランにかわりはない」

「とりあえず本日はこれにて解散だ、ブルッシク、今日はもう休め

「はい。」

夜 -

ガチャ

「ん？ 軍医の笠川か」

「彼女の目が覚めました」

「ああ、わかつた」

タツタツタツ…

濱口は病室へとむかつた…

### 13話・突然の戦争（後書き）

皆様方の「J」感想をお待ちしております。

## 14話・戦争は学院から始まる

ガチャ…

「あつ！ 隊長！」

「おう笹川！ お前は元氣そうだな」

「はー！ 2、3日もすれば実戦部隊に戻れるそうです…」

「よかつたな！ ハーボットも元氣そうdynによりだ！」

「はい！ すぐにまた訓練に戻れるよつがんばります！」

「ひづらの部屋に彼女はいます」

「ああ、わかつた」

ガチャ…

扉を開けるとちょっと幼くみえる少女がいた。  
彼女は本を読んでいた。

「では私はこれで」

軍医が去ってゆく…

部屋には瀬口と少女の一人っきりであった。

タツタツタ…

「あなたは？」

「俺は戦闘三 九飛行隊隊長、濱口健介って者だ」

「ここは？」

「病院みたいな所さ、負傷者はここに運ばれる」

「君の名前は？」

「タバサ、」

タバサと名乗る彼女、青い髪と瞳をもち小柄であった。

「ところで傷は大丈夫か？」

「たいしたことはないよ」

「どうか、なんでアンタ追われていたんだ？」

「うちの国の留学生が原因」

トリステイン魔法学院は国籍も階級もなにすらも関係ない学校であり  
ちょっとした些細な事が戦争につながる事がある。

その些細なことでタバサは命を狙われていた。

ガリア国籍の留学生10人が学院の女という女をレイプしまくつさ  
らに殺害まで

していたといい、学院は10人を退学にさせたが各国の怒りはとどまらず

ハルケギニアのほんどの国がガリアに宣戦布告、戦闘を開始したのだつた。

まず各国の田はガリア王国の王族であるタバサに向けられ殺害されよつとしていた。

「いつもはシルフィードに乗つてゐるんだけど、今田はたまたまどこのものとも  
しれない赤い飛行物に乗つてたら…」

彼女が言つた敗因は九三式中間練習機に乗つていたことらしい。

（こやどう考へても竜より赤トンボのほうが高性能だら…ちよつと  
古い機体だけど）

「最悪…今まで仲がよかつた人にまで狙われてる…」  
「お父さんは殺されるし…お母さんは…」

「やうか…お互ひ大変だな」

「こつちも散々仲間はぶつ殺されねばよつやく戦いが終わつたと思つたら

「こんな世界に飛ばされてしまつた」

「助けて」

えつ？

「あいつらから…助けて」

タバサにとつてあいつらとはトリステイン、ゲルマニア、ロマニアなどの国のほか

それまで仲良しだったキュルケ、さらに好きだつた才人まで含まれている。

もはや彼女の心の中は自分が生き延びる為、国ためのほか身近な人物に対する恐怖心でいっぱいだつた。

「…タバサ…だつたね、貴女の気持ちはよくわかつた  
だが我が軍はほかの国より装備品が優れているといえ  
三国を相手にするのは流石に厳しい、弾が足りない」

「お願い…」

（なんだ！？）

タバサが急に抱きついてきた…

（大人しそうに見えて大胆な奴だ…）  
（まづい…！）このままでは全年齢対象じゃなくなつてしまつ…）  
（そもそも好意でやつてゐるわけではない、女の子限定おねだり作戦だろこれは）  
（俺は五十嵐じゃないんだ、幼い女子に手出しあしないぞ…）

「わ…わかつたから離れて」

「うん」

落ち着いた表情で答えた、やつぱりおねだり作戦だったようだ

翌日、石原総司令官の下へ行こうと思つたその時だ

「濱口中尉！ 出撃です！」

「なにがあった！？」

「軍港がゲルマニア海軍の大艦隊に攻撃されています！」

「なんだつて！？」

「航空兵力による支援が欲しいことのことです！」

「よし！ 艦上用爆弾は！？」

「とつづけてあります！」

「出撃だ！」

一方総司令部

「まわか宣戦布告されるとほ、一気に三三國から」

「たまたま不時着したガリアの飛行機の操縦士を引き渡さないかぎり攻撃を

続行するらしいです」

「閣下！ すでに我が軍はシティオブサウスゴータでトリステイン軍と戦闘状態です！」

「なんだと！？」

「くうう… もはや戦争はさけられないのか！？」

「やはりあの少女を引き渡すしか…」

「停戦の為に若き人間を殺す氣は私にはない！」

「しかし…」

「いいのだ、こうなることはだいたい予想していた…」

「えつ？」

「かりに女の子を引き渡したにしても、今度は1500万人の人口  
中780万が軍人と

「いうガリア王国と戦争になる」

「結局の所、戦いは避けられない」

「三国に、徹底抗戦を宣言する…」

こうして石原中将は正式にゲルマニア、ロマリア、そして同盟軍で  
あつたトリステインとの  
開戦を決意した。

一方軍港では309飛の活躍もありせめて来たゲルマニア艦隊の撃  
退に成功した。

ガリアの10人の留学生が行つた犯罪、この些細な事で日本軍トム  
島守備隊は

世界大戦規模の戦争に巻き込まれることになる…



## 14話・戦争は学院から始まる（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。

## 15話・トリスティー浜上陸作戦！

開戦が避けられない状況に陥った日本軍トム島守備隊はやむを得ずトリスティン・ゲルマニア・ロマリア連合軍と戦う事になった。

・  
・  
・  
・  
・

陸海軍会議 -

「まずは、アルビオンの半分と島の近くにあるトリスティンを倒すべきだと思つ」

「それについては私も同意です」

「トリスティンはそれほどすこい軍事力を持つていな  
ましてやこの島はトリスティン囲まれている」

「戦略上もトリスティンは重要そうですね、  
補給場所に使えそうです」

「先にトリスティンを倒しひゲルマニアを倒す、  
ロマリアはガリアに任せおくんだ」

「うして日本軍は始めてトム島の近くのトリスティン王國の浜から  
大規模な  
上陸作戦で行われることになった。

309飛本部 -

ガチャ…

タバサが入つてきた…

「ど」「いくの?」

タバサが話しかける

「戦場だよ」

本当は哨戒なんだが、まあそれも戦場にいくのとかわらない

「戦うの?」

「そうなつてしまつた」

「タバサは負傷している、大人しくしている」

「健介…気をつけて」

「ああ」

(てゆーかこいついつのまに下の名前で呼ぶよつになつたんだ…どうでもいいけど)

コンコンッ

「入つてよし」

ガチャ

戦闘299飛行隊隊長楠田大尉

「浜口中尉、偵察機が大変なものを撮影したらしい」

「本当にですか？ 現像してください」

いくら同じ隊長といえ楠田は浜口よりも階級が上である階級こそがすべての軍隊ではそれが厳しいため隊長同士でも敬語で話さなければならぬ。

「おお…これは…」

「敵が浜に兵力を集中している、これでは陸軍が満足に上陸できない」

「楠田大尉！ 司令部へ連絡しましょう」

ジリリリン…

古べさい電話のベルがなる。

「…アラーム島航空隊司令官関口です」

「関口大佐、こちら戦闘299と戦闘309で、」やります、浜にはトリステイン軍が多数います、このままでは陸軍が満足に上陸できません、攻撃許可を」

「つむ、これは戦争だ、出撃を許可する」

ブロロロロロロ…

戦闘299・戦闘309飛行隊は

爆弾搭載零戦42機、爆弾搭載九七式艦上攻撃機20機、九九式艦上爆撃機3機

九六式陸攻1機と一式陸攻2機を敵の撃滅の為「トリスディー浜」へ向かわた。

濱口、楠田は零戦に乗り込む。

ブオオオオオオオオ…

多数の航空機が離陸していく。

荒鷺の歌

見たか銀翼この勇姿

日本男児が精こめて

作つて育てたわが愛機

空の護りは引受けた

来るなら来てみろ赤蜻蛉

ブンブン荒鷺ブンと飛ぶぞ…

ブオオオオオオオオ...

守備隊総司令部 -

「海軍が浜に集結した敵の撃滅の為攻撃隊を向かわせたらしいです」

「せうか…がんばってくれ」

「この戦いには我々の為にも…なんとしても勝たなければならぬ  
！」

ブオオオオオオオオ...

「今日は運がいい、敵の竜の迎撃がないらしい！」

「ええ、」

トリスティイー浜まで到着すると次々に爆弾を投下してゆく

ヒューン

ドガアア

「なつ… なんだあ…！」

「竜の羽衣がへんな鉄球を投下してその鉄球は爆発した！！」

「うああああああああ！！！！！」

ドガアアアア！！！！！」

ドオン！！ ドガアアアア！！

「ん？ 一機がこちらにやつてくる…味方か」

バババ…

ドゴオオ…

「九七艦攻が撃墜された…敵だ！ 敵が迎撃にきた！  
機種は零式戦！ 平賀才人の機体だ！」

瀬戸は直ちに才人の零戦の方向へ向かう、

ようやくちかづいたところで攻撃機3機が撃墜されていた。

ブオオオオ！！！！！」

「くつ！ 流石に戦闘機は手ごわい！」

一方才人・

「日本人同士で殺し合いなんかしたくない… でも命令なんた…  
“ごめんよ…！！”」

バババ…

一式陸攻が一機撃墜される…

その時！

「はつ！ しまつた！」

「平賀才人！ すまん！」

ババババババ・・・

才人の零戦は火を吹く…零戦は海に墜落

平賀才人…死亡

享年18歳

ブオオオ…

「本当にすまん…同じ日本人でありながら…」

濱口は氣まずくなつた…同じ血が流れ大和魂を志す同志を殺してしまつた…

だがこれは戦争である…そんな事にいちいち悲しくなつていては戦えない。

しかしどもつらいのであつた…

その後陸軍は何事もなく上陸に成功、王都「トリスターニア」を目指し東進する。

翌日、二つの花束が砂浜に投下された。  
一つは戦いでなくなつた日本兵、もう一つは平賀才人のためのもの  
だった。

才人の死は全世界に広がつた、これを機にルイズは人前に姿を見せなくなつた。

トリステインの国民は全員怒り狂つた、ゲルマニア、ロマリアにも怒りがひろがつ行つた。  
三国は総力戦を行うことにしたのだった…

15話・トリスティー浜上陸作戦！（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。

## 16話・ダングルテールの戦い

6月6日…上陸した日本陸軍はトリステインに上陸した、日本陸軍は操縦士達の負担を和らげる為滑走路を建設する必要があった。

そのためにダングルテールを手中におさめる必要があった。

そこでアルビオンからすべての戦車を撤退させすべての戦車をトリステインへと送った。

今回の戦いは第3戦車連隊のみでの戦いとなつた。

そのため指揮官は第3戦車連隊隊長辻吉宗大佐となつた。

「ダングルテールは滑走路を建設するのに必要な土地でありまた今後ゲルマニアとの戦闘を考慮し滑走路は絶対必要なものである」

「その建設には我が戦車連隊が総力を挙げて敵を倒さなければならぬ」

「はい 質問です、もし戦車と遭遇した場合我が軍はどうすれば？」

「心配はない、敵軍は戦車をもつていない、もつていたにしても運用方法がわからないだらつ」

第3戦車連隊は敵陣があるダングルテールの漁村へ軍を進めた

## 戦車隊の歌

一番 大地揺るがし砂塵上げ 無敵戦車の行くところ 疾風迅雷醜  
敵を 奇襲急襲撃滅す 燥たり我等戦車隊

二番 鬼神さながら火焔吐き 怒号天地にこだまする 十字砲火の  
只中に 率先開拓く突撃路燐たり我等戦車隊

三番 鉄軌鳴りて轟轟と 雲霞の如き敵中に 突進轟進將た挺身  
死命を制す追撃戦 燥たり我等戦車隊

四番 万雷轟く機関の音 鉄壁相摩す機甲戦 堅き団結搖るぎなく  
猛撃反転粉砕す 燥たり我等戦車隊

五番 威風堂堂聖旨を承け 無敵戦車の行くところ 大和魂華咲き  
て 勝利の讃れ我に在り 燥たり我等戦車隊

ガアアアアア…

「う～…敵がまったくでてこない」

「もしかして我々はダンブルテールの漁村へ向かっているのを知つ  
ているのでは？」

「「」」はアメリカではない、奴らが暗号を解読できるはずがないの  
だ」

だがトリステインは読んでいた、

ダンブルテール漁村守備隊指揮官パーシバル将軍

「敵は竜の羽衣を飛ばすための施設を建設するためかならずここを狙う、

戦力は充分だ、後は敵を撃滅するのみだ！」

7日夜、ダンブルテールの漁村付近まで戦車隊は迫った。だが

ガアアアアア…

キイ…

「おかしい、敵兵が一人たりともでてこない」

「はやり潜んでいるかもしぬせんね」

再び第3戦車連隊は戦車を進める、その時！

ドオウン！－！

カアアアン！－！

「敵が砲撃したきたぞ！」

弾は弾いたものの敵はやはり漁村に戦力を集中させていた。

各戦車の車長はハッチを閉める、辻吉宗大佐は命令を下す

「全車両！ 敵陣に突撃！」

ガアアアアアアアア  
：

敵の大砲を浴びても戦車はなかなかこわれない、

いくら日本の戦車が貧弱とはいえたリストライン軍の使用する大砲の弾は骨董品に過ぎず

鐵の裝甲に当たれば弾が砕けてしまふ

に限つては

ガアアアアアアアア

ガシヤアアアアン！！！

一度も戦車砲を撃たず敵の大砲は踏み潰される！

「行け！！！ 一步も引くな！！ 突撃！！！」

なんとしても陣地を守りぬこうとパーシバル將軍率いるダンブルテール漁村守備隊は抵抗する

「いやがらも一步も引くな！ 突撃だ！ ひたすら前へ進め！」

戦車にかなうはずもなく守備隊の歩兵はほぼ壊滅した。

」のまま日本軍の快勝かと思ひもや……

「きた！ タイガーだ！！」の陣地を守りぬいてくれよ！！」

「なつ！？ なんだあれは！？」

「せ… 戦車だああ！…」

メイジ達ががんばつて操つてている… あれはドイツが第一次世界大戦中開発した  
ティー・ガー重戦車だ、ティー・ガー1とティー・ガー2が存在するがハ  
ルケギニアに  
あつたのはティー・ガー1らしい。

ただでさえ連合軍から恐怖的存在であつたのにその連合軍の戦車に  
すら  
まともに戦えない日本の戦車が勝てる相手ではない  
「落ち着け！ こちらも戦車に乗つている！ 一両なら大勢でかか  
ればなんとかなる！」

実際シャーマンが大勢でかかりティー・ガーに勝つた、  
しかし九五、及び九七式ではとうてい無理だろ？…

ドゥン！…！

カアアン！…！

ドゥン！…！

力アアアン！――！

「連隊長！ 私の戦車が放つた弾は確かに命中しました！  
しかし敵にダメージが見られません！」

「くそつ！ 装甲が薄い後ろから集中砲火をしかけろ！――！」

……とはいうもののティーガーIの後部装甲は80ミリ、日本軍の戦車砲が貫ける限界の装甲をはるかに超えていた。

ティーガーが砲を放つた

ドガアアアアアアン！――！

ドオオオオオン！――！

わずかな間に

九五式が3両、九七式が2両、アッサリ撃破されてしまった。

しかし！

「どうしたんだ！？ あれ以上撃つてこないぞ――？」

「しかも動きません！」

「やつたぞ！ 弾と燃料が足きたじいござ！」

「よおし突撃だ！！」

後にトリスティン軍は撤退していった。

戦車を5両失うという被害をあけるも、一台で日本軍戦車5両以上の戦力をもつティーガー1を無傷で鹵獲できた。

道路を改造し地元住民を利用して7月1日には滑走路が完成した。

## 16話・ダングルテールの戦い（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。

## 17話・隼は行く！

守備隊総司令部 -

「閣下！ 戦闘の結果アルビオンからトリステイン軍が撤退！  
アルビオン全土を占領！ さらにダンブルテールを占領しました！  
そしてダンブルテールに滑走路を建設しました！」

「そうか… よし、アルビオンから航続距離に優れる隼を40機ダン  
ブルテール基地へ  
送つてくれ、それと防空用に九七式戦闘機を全機ここに配備させ  
てくれ」

「はい！」

こうしてダンブルテールを拠点とする隼主力の陸軍航空隊が結成さ  
れた。

ここにはドイツ軍のbf109Gも配備された。

航空隊隊長は陸軍の高橋少佐となつた。

「我々の主な任務はラ・ロシェールを攻撃、占領して包囲されてい  
るガリアを  
救い出すというものだ」

「ラ・ロシェールには数百の竜騎士と数千の地上部隊がいる。

その竜騎士と戦い制空権を確保し第3戦車連隊を支援するのが任  
務だ」

ブロロロロ...

隼のエンジンがうなる

タツ サツササツ...

タツタツタ...

「おい柏葉！一枚とつてやる！」

「はい！」

カシャ！

隼戦闘隊はラ・ロシェール周辺の制空権を手に入れるため飛び立つた

加藤隼戦斗隊歌

一、

エンジンの音轟々と  
隼は征<sup>ゆき</sup>く雲の果て  
翼<sup>よく</sup>に輝く日の丸と  
胸に描きし赤鷲の  
印は我等が戦闘機

ブオオオオ...

「ハ・ロシヒールだ」

「最近、この国のコルベールという奴が開発した対空砲が実戦配備されてこむらじこ、氣をつける！」

ドン！

ドン！ ドン！

ドン！ ドン！

高橋の情報は確かだつた、対空砲といつてもこの世紀のものから見れば骨董品にすぎないのだがそれでもあたれば飛行機ば壊れる。

正面から迎撃にきた竜騎士団が迫る。

ドン！

ドン！ ドン！

ドン！

対空砲火が激しい、それでも隼は竜騎士達を次々と落していった。

一機が対空砲に爆弾を落した、対空砲はぶつこわれ隼は軽くなつた。対空砲を破壊すべく次々と爆弾をおとしていた。

ドオオオオン！――！

ビームが

ドゴオオ！――！

「あつ！ 柏葉！！」

「柏葉！！！」

「ハハ…ハハハハハ…」

前方にはトリステイン軍の戦艦が

「うなつたら地獄の道連れだ！－！」

炎上する隼で柏葉は東方号に特攻した！

東方号はたちまち燃え上がり墜落した。

# 夜

「隊長は？」

「はっ！ 隊長殿は部屋にはこませんでしたー。」

外…木の下…

「おー柏葉…とうとうこの写真が最後の写真になっちゃったな…」

「まつてうよ…俺もすぐこくからな…！」

隼戦闘隊は多大な戦果をあげていった。

地上部隊なしで2日之内にハ・ロシユールのほとんどを占領することができた。

その戦果が認められ高橋少佐は中佐に昇進した。

あの日の出撃だった…

ブオオオオ…

「今日の戦いでおさらベラ・ロシユールを占領できるだらう

「もうすぐそのハ・ロシユールです」

ブオオオオオオ…

はたして今回まじめどおりの快勝か？

「隊長、最後の竜騎士隊が迎撃にきます！」

「よし、迎え撃つぞ！」

「隊長、竜の中になにかが！」

「ん？」

なんと竜の中にハリケーン戦闘機が2機まじつていた。  
どこで手に入れたんだ？ 塗装はトリスティンで塗られたのかトリ

ステインの国旗が

記されている、これはきっとビリーにあったのを鹹獲、メイジが飛  
ばしているのだろうか？

それとも自国産？ いやそんなわけがなかつた。

「隊長！ ハリケーン戦闘機が2機まじつてます！」

「くそつー！」

ババババ

ブウウウン…

「つまーい！ 」の世界でいう魔法でも使つていいのかー！？」

ババババ…

バ  
バ  
バ  
：

ドガアアアン！！

卷之九

バ  
バ  
バ  
：

ブウウウン

ダダダダダダ...

ピッ！・！・！・！

「オオオオオオオオ！・！・！・！・！・！

「隊長——！」

「隊長殿——！」

ブウウウウウウウウウウウウウ... ドゴオオオン!!!!

תְּהִלָּה

「隊長……！」

1

の戦いでラ・ロシェールは日本軍のものになった・・・  
だが高橋中佐というベテランをまた失つてしまつたのだ・・・

後にハリケーン戦闘機はイギリス人がトリスティンに残していつた  
ものだと

判明、機体の状態がよかつた1番機を鹵獲、修理を開始した。

高橋少佐は亡くなつた、だが、彼はこの戦いで大いに活躍し  
その栄光は永遠に隊員たちから忘れられることはないだう・・・

## 17話・隼は行く！（後書き）

皆様方の「」感想をお待ちしております。  
なお今回は決断の14話にかなり影響されております。

309飛本部 -

「大陸では陸軍ががんばってるらしいですね」

「ああ、陸上戦ともなれば海軍に出番がないからな、アルビオンの時と同じ緒戦しか活躍できないみたいだな」

タツタツタツ…

「隊長、ガリア王国から手紙です」

「どれ？」

濱口は手紙をとる。

「なに…現在我が国はロマリア連合皇国から侵略をうけている。軍はこれに対抗しているがロマリアは場違いな工芸品を多数所持している。

幸いなことに場違いな工芸品を生産する力がない。しかし生産できなくとも運用方法は知っている。

いくら我が軍が他国にくらべて精鋭であるとはいえ場違いな工芸品相手には

無力である…そこで場違いな工芸品を多数所持している日本軍に強力を要請する。

互いの自立の為共にがんばり

ガリ

ア王国外務省大臣

「なるほど……我が軍でないと抵抗できぬほどの場違いな上級品……つまり兵器を持つていてしかも運用方法まで知つてゐるといふのか」

「生産できないのが唯一の弱点……って感じですね」

「陸軍はトリステインとの戦闘でこそがしい、トリステイン攻略は陸軍に任せて

海軍はロマリア攻略を行つたほうがよきがむづがだな」

夜 -

「さうか、では海軍が主体となつてロマリアを攻略するとじようか、情報をありがとうございます、濱口中尉」

「あらがとうござります、木下少将」

こゝじてロマリア皇国には海軍を主体とした大規模な戦いが行われよつとしていた。

ロマリア海軍を撃滅すべく帝国海軍第7艦隊の戦艦1隻 巡洋艦2隻、駆逐艦3隻、空母1隻。

戦闘299、309、そして空母の艦載機で編成される319飛行隊の零戦を始めとする

航空機約100機。

地上にはアメリカ軍戦車連隊のシャーマンとガリア出身の志願兵1200人、

日本陸軍3000人の歩兵、砲兵が集まつた。

こゝしてロマリアによるガリア侵攻を食い止めるべく日本軍は動き

出した。

7月10日…第七艦隊出航

軍艦行進曲が流れる…

がああ…

強そうな軍艦と勇ましい男たちが港をでる。

第七艦隊…というわりには規模が小さく見える。

これは第一次世界大戦中、艦隊の艦船は島付近で米海軍に沈められたり

戦局の悪化に伴い引き抜かれたりしたせいである。

また引き抜かれた軍艦のほとんどがレイテ・マリアナ沖海戦で沈んでしまった。

そのためトム島に残るのは本来の戦力の端っこくらいにすぎない。

一隻でも貴重な存在となっていた。

特に一隻のみの正規空母「雷鶴」が沈んだ場合艦載機が失われてしまい航空兵力、

海軍力がかなり失われることになる。

まず戦闘299、309飛行隊がガリア政府が建設した空港に到着、ここを拠点としロマリア連合皇国の中空権を手に入れる為戦うのであつた。

第七艦隊はロマコア半島の軍港を制圧する為大陸を回るよりつ航海した。

陸軍はトリステインの日本占領地からガリアを通り海軍航空隊と共にロマコア半島を根っこから攻略するという作戦をとった。

途中燃料の補給が困難と思われたがガリアではすでにガソリンなどの燃料の複製が可能であった。

ちなみに299、309飛行隊の基地はロマコアとの国境に近いラバウルという所に建設された。

ラバウルとは実際の世界にもある地名でありかつて日本軍航空隊の大要塞であった。

日本軍は299、309飛行隊をあわせて地名も同じであることから「ラバウル海軍航空隊」とよんだ。

ラバウル海軍航空隊本部 -

「しかし偶然だな、濱口中尉がかつて所属していた航空隊があつた場所と

同じ地名なんてな

「ええ、なんとなく懐かしい気がしますよ、名前的に」

「明日からまた戦いが始まるんだな」

「そうですね」

「さて、私はそろそろ戻るとするよ」

「はい」

そういうと楠目大尉は扉を閉めて自分の寮へと帰る。

「ふう……」

コン、コン

「ん？ 入つていいぞ」

ガチャッ

扉の外に立っていたのはタバサだった

「あれ？ どうしてここに？」

「追つてきた、赤い飛行機で」

「追つてきたって……しかも赤トンボでどうやってここまで

「燃料いれたりしまくった、やつぱりシルフィードより使えない

「そうかい……」

「これ、差し入れ」

なんとタバサがもつて来たのは寿司だった  
ほかにも日本語訳の本とかはあったが…

「ど…どひつてこの世界に寿司が？む

「東にある国に学びにいった料理人の店がちかくにあった  
「これ、売つてたから、健介好きそうだし」

たしかに濱口の大好物は寿司だ、しかし東の国つて？  
もしかしてこの世界にも日本という国があるのか？

「あの、タバサ？」

「なに？」

「東にある国の名前つて…知つてる？」

「大和帝國」

「大和帝國？…まちがいない…この世界の日本だ」

そう、この世界にも日本と同じような国はあった。  
とりあえず濱口は日本地図をタバサにみせてみる

「あの、大和帝國つてこんな形の国じゃない？」

「そう」

「やつぱりだ…俺の国の異世界版だ…」

「やうなの？」

「多分、俺の国は大日本帝國つていう所だけど」

瀬戸は真相をやうにつきとめよつとする

「やうだー、その国、かわつた人とかいないか？」

「私、行つた事ない」

「…やうか」

「でもそのおじさんからいろいろ話は聞いた」

「雰囲気は厳格でピシッとしてて礼儀正しくて武士道…と変な志をもつてこりしー」

そのまんま日本であつた。

さらにタバサは説明する。

「魔法はないらしー、でも東の世界の支配者らしー  
「軍隊の装備もこつちよつといらしー」

この世界の日本は現実世界よりも早く装備の近代化が進んでいるらしく

東の世界のほとんどを領土にもつていてるらしー。

「でも今行き来するのは難しい」

「えつ？ なんでだ？」

「聖地を通る必要がある、そのおじさん魔法の達人だけかなり無理して

強行突破したらしい」

「でも帰ってきた時全治一ヶ月の重症おつていた」

「簡単には突破できない」

「そりが…」

「ちなみに場違いな工芸品は聖地のあたりからよく発見される、  
大和帝國もこの時代のものとは思えないものを装備してゐる…らし  
い」

（…もしかして…俺たちは帰れるんじや？

聖地と…大和帝國…カギはあるかもしけない）

「ところで明日から戦いに行くの？」

「えつ？ ああそうだよ」

「がんばって、応援してる」

「ああ、ありがと」

「またね、健介」

バタン…

タバサは優しい感じでまたねといつと部屋から出て行つた

瀬戸だけが知る真実、東の世界に大和帝國といふ超文明国がある…

(…)

(本当に、そこに突破口はあるかもしない)  
(こんな低文明世界に日本だけが突発的にすごい兵力をもつてている  
のはなにかおかしい)

(そんなにすごかつたら現実世界でも日本は鬼畜に勝つていた…)

・・・

(考えても無駄だな…明日も早いし寝よう…)

翌日 -

ブオオオオオ…

戦闘299、309飛行隊の戦闘機隊はガリアの国境近くにあるロ  
マリアの軍の基地がある、  
「ヒルリー」の制空権を手に入れる為戦闘機を飛ばしヒルリー  
へ向かつた。

ブオオオオ…

「隊長、今回の戦いはいままで最も厳しい戦いになるつて本当ですか？」

「ああ、ロマリアは場違いな工芸品を研究してゐるらしいがで拾つた兵器を

たくさん集めているらしい」

「航空機だけでも200機は集めたらしいぞ」

「そ……そんなにですか？」

「ああ、生産できるほど技術がなくなよかつた、こつちは小規模ながら工場もある」

「ただし……厳しい戦いであることは避けられないな……」

「第一次世界大戦頃の古飛行機ならいいですがね……」

「隊長……」「ちりちりちり//タ機ー右前方敵機！」

「こちらに向かつてくる戦闘機は運がいいことに第二次世界大戦までに開発、製造された

航空機ばかりだった、戦後の高性能機は見られない。

「ん~、今確認できるのは……零戦、九六艦戦、P-26、P-36、I-153 I-16 フィアットCR-42……

たくさんあります……」

「とりあえずあの中では零戦が一番手」わそつたが倒せない相手ではない、行くぞ！」

揺るがぬ護りの海鷺達が

肉弾碎く敵の主力

栄えある我等ラバウル航空隊

ダダダダダダ…

ドガアアアアアアアーーーーー

ブオオオオオ…ダダ…ダダダダ…ーーーーー

練度の差で大きく勝るラバウル海軍航空隊は戦闘機が相手でも引けをとらなかつた。

日本軍の損害は僅かなのに対しロマリア空軍の損害は激しいものであつた。

2日後陸軍はヒルリーーの基地を制圧、航空機20機を鹵獲、またラバウル海軍航空隊の活躍もあり制空権とともにヒルリーーを完全に制圧した。

一方ガリア北部ではゲルマニア軍が侵攻してきた為ガリア軍との戦闘が開始されていた。

兵士の練度と数で勝るガリア軍は自国の領土にゲルマニアの軍の足を一步も踏ませることがなかつた。

## 1-8話・東の大帝国（後書き）

皆様方の「」感想お持ちしております。

また作中登場した「大和帝國」は本家ゼロの使い魔には登場しておりません。

あと正規空母「雷鶴」はもちろん架空の空母です。

## 19話・ロマニア制圧なるかー?

瀬戸達が戦果をあげて居るその頃、第七艦隊は着々とロマニア半島へと迫っていた。

「閣下、まもなくローマに到着します」

ローマとはロマリア連合皇国を中心地、なお現実のイタリアにあるローマとは全く関係なく場所も違つ。

「さうか、ロマリア最大の都市であるあそこを占領すればこの戦いは日本にとって有利なものになる」

「しかし、ローマにはなんでも地球産の艦艇が多数並んでいるらしい、

燃料不足により動けはしないのだがその分海に浮かぶ大要塞と化しているんだ」

「しかし、艦船や弾を生産する技術がない、修復する技術もない、つまりはちょっと破壊すれば使い物にならなくなる」

「船を失いたくない、船は島の工場じゃ生産できない、特にこの空母の損失が一番でかい、この空母「雷鶴」<sup>らいかく</sup>は翔鶴型航空母艦の

三番艦である、日本海軍に残された僅かな空母だ」

「失うわけにはいかない、そこで艦載機による攻撃隊を送る事にする」

ブオオオオ…

戦闘319飛行隊隊長上條英樹大尉

「よつやく俺の出番のようだな」

「まつたく299や309の奴らするこですよ、自分たちだけ活躍  
しゃがつた」

「だがここで俺たちがロマリア海軍に大打撃を与えたらそれはそれ  
で大戦果だ、  
やつて後悔する戦いじゃないし俺たちだけなにもしないってわけ  
にはいかないしな」

「よし！発艦しろ！」

ブオオオオオオオオオオ…

・

・

・

ロマニア海軍ローマ基地総司令官アブラー・モ中将

「なに！？ ほぼすべての砲塔がつづかない！？」

「はいっ！」

「敵の機動部隊が迫っているんだぞ！？ 精神力で直せ！」

「ムリです！ それに兵士達の士気も低い！ 戦闘はほぼ不可能で  
す！」

「貴様は國を滅ぼしたいのか!?」

「もちろんそんな『させ』やついません! しかし私は現実を述べてい  
るだけで…」

「なんだと……貴様は軍事裁判に出してやるぞ……！」

ガチヤ

「閣下！ 大変です！ 敵は飛行機で！」

「なんだとー!?」

「アアアアアアアーン！－！－！

燃え上がるロマリア海軍の艦艇を見てアブラー中将は啞然であつた

1

「戦闘機の迎撃は？」  
聖地付近で手に入れた航空機が200機近くあつただろ」

「それが…」

「ほんとが敵軍に落されてしましました…

敵の戦闘機は、こちらよりも新しいものらしいです……」

「…」

ドオン！

アブラー モ中将は力強く机を殴る

「ええい！ 空軍の役立たず！ いつなつたら船に積んである対空砲だけで

なんとかしろ！…！」

「祖国の為に死ぬ氣で戦え！…！」

ブオオオオ…

「どうこうことだ？ 反撃してこないぞ？」

ローマ軍港は航空隊の活躍でほぼ壊滅状態であった。

またロマリアは予想よりも早く内地へと敗走していったのだ。

開戦から僅か1~2日、首都「ロマリア連合都」が陥落。日本・ガリア連合軍の圧勝であった。

ロマリアの敗北にはいくつかの理由があった。

まず軍需工場もなく技術もないのに「場違いな工芸品」に頼りすぎたことだ。

戦闘開始僅か6日でほとんどの弾を撃ちつくしてしまったのだ。

その程度でしかないのに古来の騎士団などはすべて解体されたのだ。

もう一つは「内戦」であった。

騎士団が解体されたことによって異教徒との内戦が勃発。異教徒らは攻めて来た日本・ガリア連合軍の味方につきロマリアと戦つた。

聖地奪還の為兵力の大半を聖地へ送っていたこと。戦力が分散しすぎていたことも敗北の理由だろう。

一方トリステインへ出征した日本軍はロマリア降伏の日、タルブを占領した。日本軍とトリステインの戦争はいよいよ最終局面へ突入しようとしていた。

19話・ロマコア制圧なるかー? (後書き)

皆様方の「」感想お待ちしております。

7月27日…日本軍とトリステインの戦いは最終局面へ突入しようとしていた。

ロマリアを制圧したことで陸軍のロマリア攻略部隊が休まずに3日間でタルブへ移動。

またアルビオン守備隊からも500名がトリステイン攻略部隊と合流。

さらに修理が完了したティーガー1が日本軍戦車連隊へ。

ハリケーン戦闘機と新造bf109F1機、隼2機が陸軍航空隊へ。

その他には日本海軍戦闘299、309飛行隊が参加、二つの航空隊にも新たに発注された

零戦52型10機、さらにはロマリアの空軍基地で無傷で鹹獲した零戦21型2機、

F4Fワイルドキャット3機が配備され二つの航空隊が空中戦で失った戦闘機10機を

同じ数以上一気に補充することができた。

またそのほかにも元ロマリア異教徒やガリア出身兵、ガリア正規軍などがあつまり2万近い兵力となつた。

一方第七艦隊は次なる戦いに備えトム島へ退却途中だった。

一方トリステインもすべての兵力を王都に終結。

正規軍のほかにも戦闘員として王族、貴族、平民問わずに集められ女性や10歳にも満たない少年少女、老人、勉強に忙しい学徒までが動員された。

トリステインは民衆から生活上最低限度必要なもの以外を武器を作るために回収。

さらに戦意向上の為多数のプロパガンダが作られた。

トリステイン政府が発表した曲である

玉碎絶対！

1 小国国民の皆様と  
共に死ねるこの時ぞ  
来る戦い勝つべしそ  
我ら全滅してもだ  
やると決めたらやりぬくぞ

2 国民一丸の総攻撃

我に驚き敵は去り  
その為我ら火の玉ぞ  
死など恐れてなるものか  
玉碎覚悟で進むべし

3 そうだ玉碎今時だ

一人一人が決死隊  
お国の為に死ぬ事は  
なんら恥すべきことじやない  
何がなんでもやりぬくぞ

トリステインは大日本帝國を超えていた…玉碎精神は…

だが政府や王室内でも「」の体制に反感を持つものはいた

王室

「女王様… 今のうちに降伏すべきでは？」

「」のままでは国民全員が死んでしまいます…」

「いいえ… 私の政策でもトリステインは一番になることはなかつた、おまけに戦争は負けることがすでにわかりきつています…」

「トリステインは一番になれなかつた… だから滅びるべきなんです… それに国民も占領されて奴隸にされるより國の為に死んだほうが幸せです」

「それにこちらは英雄平賀才人を殺された… いまさら引き下がれません…」

「しかし… すでに政府関係者は名の知れたメイジ達は亡命を始めました

我が國で最も天才であるコルベール様も「」かへ亡命されて…」

「一番になれなかつた国は滅びる運命しかないので…」

「ゴオオオーン…！」

「…！」

「女王様！ 日本・ガリア連合軍が王都まできました…！」

「トリスターニアを死守しなさい…」

「…は…は…」

「…」

（こんな私の本意ではないことくらい自分でわかっている、  
でも今更降伏したところで私の命なんてない…国もなくなる…  
なら…みんな死んでしまえばいい…）

市街地 -

ダダダ…ダダダダダ…

ドゥン！…！ドゥン！…！…！

狭い土地と大勢の兵に日本軍はなかなか進撃ができなかつた。  
しかし士気が完全になくなつていたトリステインの人々は次々と日本軍、あるいは  
ガリア軍に投降していった。

8月1日午前10時半には王城を占領、まちのほとんどを占領した。

城には多数の焼死体が…王室の人たちは占領される前に皆自決した。  
だがトリステインの残党はトリステイン魔法学院を拠点とし戦闘を  
続けた。

8月正午に日本・ガリア連合軍はトリステイン魔法学院までたどり  
つき  
最後の戦いへと突入する。

トリステイン魔法学院攻略部隊を支援する為戦闘309飛行隊は学院へ向かつた。

ブオオオオオオオオ

「なんか…似てるな…」

「えつ？ なにがですか？」

「日本の末路と」

「…」

「かわいそうになつてきた」

「しかし…」

「わかつてゐる…戦争なことぐらい」

「許してくれ…戦争に汚いも糞もないんだ…俺たちだつて鬼畜どもにボロボロにされたんだ」

瀬戸は敵が空を飛んでいないか索敵を開始した。

しかし竜はどこにも見当たらない。

戦艦の姿もない。

もはや竜、稼動可能な艦船はゼロであった。

しかし正面の塔に誰かが立つていてのを見つけた。

「あいつは…」

ルイズだった 攻撃でもしかけるつもりか

「まちがいない、オ人という日本人と一緒にいた女だ！」

その時！

ゴオ！！！！

「！」

なにかが起つた：濱口機と五十嵐機ともう一機になにかが

瀬口は光が見えた瞬間意識を失う

その後どういうわけかトリステインとの終戦がまじかになつたころ。仲間であるはずのゲルマニアがトリステインに宣戦布告。一気にロマリアとアリステインを倒した日本を恐れたのか寝返つたのである。

結局トリステインは敗北、その後ルイズはどこへ行つたのかは定かではないが、二度二人前二度を見す二二はなかつた。

一度と人前に姿を現すことはなかつた。

ある口…

彼は目覚めた

「…」

目が覚めたらそこは病室であった。

「大丈夫?」

濱口が寝ていたベッドの隣にタバサが座っていた。

「…」

「トム島」

「俺は?」

「私が助けた」

後からタバサに話を聞いた濱口は知る、自分が食らった攻撃は「虚無」というらしい。タバサは間一髪で濱口を助けたという。彼女自身も軽傷だが怪我をしていた。

カレンダーを見ると…

日本時間の1946年8月15日…終戦から丁度一年だった。

「そりいえば五十嵐も虚無に巻き込まれたよつな…」

「助かつたのは健介一人、五十嵐含む残りの三人は戦死」

「そりか…俺だけ助かつたのか…」

（すまん…俺もいつかお前らの所にいくからな…）

これまでの戦いで陸海軍あわせて2850名が亡くなつた。  
25000人の守備隊から2850名が亡くなつたのだった。

「よかつた」

「ん? なにがだ?」

「健介が助かつた、今日祝つてね」

「なにを?」

「今日、私の誕生日」

「そりか、今年で何歳?」

「16」

「16か…俺が飛行機乗りにあこがれていた年頃だな。  
もうあれから10年経つな…」

「でもタバサ、わるいけどたいしたお祝いはできないよ、  
一瞬曲芸飛行でも見せてあげようかと思ったけど」

「」の体じや飛行機操縦できない事に気がついたんだ

「いい、おめでとうって言つてくれるだけで」

「えつ？」

「ああつ…おめでとう」

「ありがとう」

しかし16歳つて祝われてももうれしくもない歳なのになんでタバサは、しかも何故タバサは濱口だけを助けたのか…」

ガチャツ…

299飛の楠目大尉だ

「おつ？ 邪魔しちまつたか？」

「なんでそつなるんですか…」

「だつてタバサちゃんお前のこと気にいつてるみたいだし」

「それを本人の前で言つんですか…」

「ははつ それよりお前なに敬語で話してんだ?」

「はい?」

「ははつ そつだつたお前寝てたんだもな、知るわけないか  
「お前、大尉に昇進したんだよ」

「ほつ……ほんとうですかーー？」

「ああ、俺はあんまり活躍してなかつたしお褒めの言葉すらだけどな……」

「……つーわけで俺もお前も同じ階級だ、同期でもあるじょりじょくなー！」

「あつ……はいー！」

「じゃあまたな、あともう敬語で話さなくていいからな

「わかつてゐるや」

「じゃあ、またな

バタン……

濱口はこれまでの戦果が認められ寝ていてる間に大尉に昇進したという。

## 20話・王都決戦（後書き）

皆様方の「」感想お待ちしております。

トリステインの作った曲の元ネタは  
大政翼賛会が作った「進め一億火の玉だ」といふものです

## 21・//シテウホーのトトロー?

8月1~8日.. タバサが助けてくれたおかげでもう動くぶんにも支障がなくなつた濱口であつた。

「そりいえばタバサ?」

「なに?」

「お前つてガリアの人間だよな」

「うん」

「帰らなくともいいの?」

「いいの、全部兄におしつけといた」

「えつ?」

実はタバサには兄がいた、兄にすべてをまかせたといつ。

「だから、健介と一緒にいれる」

タバサが近寄つてくる、しまいには体をくつつけてくる

(なつ... なんだつて!?)

「健介... ありがと」

「えつ？」

「健介いなかつたら、死んでた、多分」

「そつか…」

「健介…」

「なんだ？」

「好き…」

「えつ？ それ本当か？」

「うん…」

（な…なんだこの唐突な展開は？

夢か！？ そうだな、島からこんな世界に飛ばされてしまいに現地の女の子に

告白されるなんて夢に違いない…戦争も終わったのに仲間も死んで行くし…）

（でも痛みは感じる… 感触もなにもかもだ… おかしい…）

タバサは落ち着いた表情で濱口にくつづく…

「健介？」

「ん？ どうした？」

「健介は？ 私の事……」

「ん？ ああ……」

あまりにもありがちな展開に濱口は困るのだった、  
しかし女子を傷つけてはならないと教育されたらしく今は止まっているのだった、  
の五十嵐が

好みそうなタイプである、嫌いといえどもおわれるだらう…  
濱口自身も女子と付き合つのが夢であり彼女いない暦=年齢の彼  
にとつて  
チャンスでもあった。

「ああ、タバサ」  
「俺はお前が好きだ……」

言つちやつたのであつた…もう彼女いな暦=年齢とはおちりばだ。  
タバサは田をつぶりキスをしようとしていた…

「！？」

（なんだと…？ そこまで俺の事を好きだったのか…）の短期間で…  
俺のどこにホレたんだ…？）

（俺は確かにカツコイイとは言っていたがそこらじこらの普通の田  
本男児だ、

とくに変わつたところもなく軍内の階級もたいしたことない（  
（でも…何故だ…おれもこいつの事が…嫌いになれない…好きなの  
かもな…）

濱口もキスをしようとした…だが…！

「！」「！」

二人はもつすこしでキスするところだったがノックの音でやめた。

「は…入れ…」

ガチャ！

入ってきたのはガダルカナル戦より俺の部下であつたミタだ  
戦闘309飛行隊の副隊長として、また若鷺の教官として今は働いている。

「隊長！ 本日の訓練！ 終わりました！」

「そりが… では伝えておけ、本日はこれにて解散と」

「はい！」

バタン…

「タバサ…ここは危険すぎるな」

「うん… 我慢する」

二人は学習した、軍の施設で恋愛は危険だと…

しばらく一人は黙り込む…とあるときタバサが話しかけてきた

「健介？」

「なんだ？」

「ハルケギニア世界大戦が終わったから…今度は…行くの？」

「行くの…つてどこの？」

「東の大帝国…大和に」

そう…濱口が睨んだ東の世界にある大帝国「大和」  
そこに日本帰還の鍵があると濱口は睨んでいた。

「ああ…帰れないにしても…興味はあるよ」

「じゃあ…いく？」

「えつ？ でもまだ皆支度がてきてないし…」

「私たちだけで」

「いやあそういうわけにもいかないよ、  
逃亡者には厳しい刑が待っているし」

「でも…行きたい…よね？」

よね…ってなんだろう。

しかし濱口は東の世界に行つてみたいとは思っていた。

「ああ……うん」

「でも……島の全兵力でいくのは難しい」

「戦車とか飛行機なら陸からいけるし補給も可能、でも船はムリ」

タバサは俺たちといつしょにいる時間がほかのハルケギニアの人よりも長いため

ハルケギニア出身の軍人以外では一番現実の世界に詳しいのであった。

「……だつたら……その船で俺たちがいけばいい」

「えつ？」

「たしかに大変だとは思つけど」の島の兵器はすべて内地から輸送されたものだ。

「大艦隊でいけば遠くともなんとかなる」

「それにガリアの魔法使いを一人つれていけば燃料とかは一滴でもあれば何百倍何千倍にまで復元できるんだろ？」

「うん」

「全兵力を輸送するにはいい案だと思うけど……その船がないよね……」

「ある」

「えつ？ 本当なのか？」

「ガリアには輸送船が沢山……船全部使えば多分」の島の全兵力を載せる事もできる

「それはありがたいけど…飛行機は空母がないと…

陸軍機には関係ないけど海軍機は空母に乗せておけばよいってでも出撃できるんだ」

「でもその空母は「雷鶴」しかない」

「まあすべての海軍機つてわけじやないけどね」

「空母？　雷鶴？　平たい船？」

「うんそうだよ」

「あれもある、　この近くに」

「うそ…だろ？」

「4年前の6月7日、ガリアと田トリステインの国境に大きな平たい船が四隻…」

「本当か？　ここから何キロ？」

「500」

「この島の飛行機の航続距離で充分間に合ひ…こつてみよう」

こうして一人は四隻の空母と思われる船があるガリアと田トリステインの国境付近にある  
海沿いの漁村へとむかつた。

零戦は一人乗りであるためかわりに同じく航続距離が長くまた戦闘

機であるため

戦闘が可能な夜間戦闘機「月光」に乗り向かった。

・・・

ブオオオオオオオオ

「楽しい」

「そうか？」

「健介と一緒に飛行機乗るの」

「そうか」

「綺麗な海だな」

「海水浴でもしたくなるね、健介」

「そうだな」

最も濱口は海軍、海なんて珍しくもなかつた

「ところでタバサ、四年も海に放置してあるんだろ？  
ボロボロになつてないか？」

「大丈夫、固定化の魔法がかけられてある」

「固定化？」

「うん」

「固定化の魔法をかけると朽ち果てる事はなくなる」

「そりなんだ」

「見て健介、あれだよ」

「ん?」

「!」

濱口は四隻の船を見てびっくりした…

「あれは…赤城…あつちには加賀…飛龍と蒼龍まで…」

「全部ミッドウェーで沈んだ…海軍の正規空母だ…」

「なんでこんな所に…」

「そつ…実は赤城・加賀・飛龍・蒼龍の正規空母四隻は沈んでなかつた。」

沈んだと思ったら…ここハルケギニアに召喚されただけだったのだ…

それが後の日本敗北へと繋がった…といつ

「…健介?」

「まちがいない…」これはミッドウェーで沈んだ四隻の正規空母だ

「?」

「でも… これさえあれば俺たちは大和帝國へいける  
「四隻は流石に多すぎる気がするけど…」

21・アダムのトトロ（後書き）

皆様方の「」感想お待ちしております。

## 22話・帝國海軍 vs 帝國海軍！？

海軍司令部 -

「...とにかく」とです。」

「そうか、すこいものを見つけたな瀬戸大尉」

「はいっ！」

「だが...空母四隻を動かせるほど我が軍には兵員がないのだよ」

「そ...そりですか...」

「でもだ、そこにあつた空母一隻と雷鶴さえあれば海軍の航空機の運搬は可能だ

それにガリアのタバサの話ではガリア海軍の輸送船全部貸すつて いつてたし全部必要というわけではないだろ？」

「私としては赤城と加賀と雷鶴をあわせればいいと思つのだ」

「えつ？ では残り一隻は」

「ふうむ、ガリアと我が國の友好の為飛龍と蒼龍はガリアにプレゼント する」とこしょつ

「いつ...いいのですか？」

「どうせ我が軍は今の状態でも精一杯で一隻でも空母が増えたら運

用ができない」

「あの二隻はガリアから人がきてくれることを想定しての導入予定だ」

その後約束どおり赤城と加賀を運用してくれるガリア人が派遣された。

その他の艦艇の兵員不足もこれらによつて解決された。

このガリア人は皆職を失つた者であり仕事がはいつたときは歓喜したという。

戦艦2隻 巡洋艦3隻、駆逐艦5隻、空母3隻 陸軍揚陸艦1隻とガリア輸送船多数による大艦隊が編成された。

8月25日…

ザアアアアア…

濱口は空母赤城に乗り込んだ

濱口は甲板の先頭でタバサと話していた。

「もう…夏も終わりだね」

「ああ」

「来年…海水浴いこ？」

「ああ、いいよ」

「そういえば、聖地の件は？」

1  
h  
?

「健介、聖地もいきたいって……」

「聞く話だと、いつたらただじや済まされそうにないからな……これ以上人を死なせるわけにもいかないし」

「そうだね」

「そんな事も考えて俺は海上を移動すればいいと思つたんだ」

「なんだ？」

」<<怒火--!!--

「フツ  
かわいいらしこくしあみ」

「いつたな」

「甲板は結構寒いからな、そろそろ中入つたほうがいいと思うよ」

「うん」

空母の中 -

「そりゃガリアの輸送船つてどのくらい速度出るの?」

「巡航速度は17ノット」

「結構なものだね、じゃ あすぐ大和帝國につきそつだね」

ガリア海軍の力を借りての島の全兵力を輸送する大規模な作戦：  
木下中将率いる木下機動部隊は順調に大和帝國へとむかっていた…

ハルケギニアの地図で現実世界でいう南アジア付近のことだった…

時は9月…ガリアの魔法使いのおかげで燃料にはこまらなかつた。  
また食糧も港町で買うことができた。

そういう月のある日だつた…

ドゥン――――

ドシャアアアア――――

「なんだ！？」

一人の兵士が爆音と波の音で気がつく。  
外を見ると…軍艦だ…それも煙突から煙がでている…動力がエンジ  
ンの軍艦だ！

「…旭日旗？…連合艦隊！？」

どうも日本の船くさい船がひからに攻撃をしてくる。

「自衛戦闘を行う！ 総員各位置につけ！」

ブロロ…ブロロロロ…！…！…！

「発艦を許可する！」

ブオオオオ…

「健介！…！」

「大丈夫だタバサ、すぐ戻つてくれる」

ブオオオオ…

濱口大尉の零戦が飛び上がる… それに続く航空機も飛んでゆく…

ブオオオオオオオ…

「あつ… あぶない…！」

ド「オオオオオオン！…！…！」

空母赤城 -

「被弾しました！」

「被害は…？」

「浸水です！」

「右舷注水！！」

「大丈夫だ！ 赤城はまだ動ける……」

289、299、309、319飛行隊 -

「よし！ 敵艦に攻撃開始！」

「待て！ 敵艦は攻撃をやめた！」

「なんだと！」

「退却していく！」

「どうこうことだー？ 数的に相手のほうが有利なはずだ

空母赤城 -

「敵艦は攻撃をやめた」

「閣下！ 上を！」

「……」

「向こうから何かが飛んできた… オートジャイロだ！」

「馬鹿なー！ この世界にあんなものが存在するわけ

そのオートジャイロの色は白くそして日の丸に剣が描かれていた。

恐らく日本武尊の剣と田の丸をあわせたのだろう…

オートジャイロは空母赤城に着艦した  
木下中将が艦内からでてくる。

タツ…

「言葉…通じますか?」

オートジャイロから降り立つた男は日本語をしゃべった。

「ああ、通じますよ」

「あなたがこの船の…」

「ええ、」の艦隊の指揮官でもあります木下も申します

「先ほどはすみませんでした、旭日旗を見るまで敵艦かと」

「実を言えば我々は貴方達の國の人間ではないのですが

「…とこごますと?」

「少々信じられない」とぞしょづが我々は突如神隠しにあここの世  
界にきてしまつた。

しかし、ある事に気がついたのです

「我々は大日本帝國といつ所からきました

「大日本帝國？」

「我々の世界にある国で我々の祖国です」  
「その大日本帝國がある場所と、貴方達大和帝國のある位置が一致  
していたのです」

「なるほど」

「そんなことを言つて我が国に幾人の人間がきたな…」

「なんですか？」

「（…）数百年くらいはみないのだが… その人たちのおかげで大和帝  
國は  
現代化が進んだのです」

「そう… 大和帝國に漂流した方々のおかげで」

「なるほど」

「話はあとでゆっくりききたいのですがそこのおートジャイロを  
よけてくれませんかね？ 艦載機が着艦できないのです」

「ほう オートジャイロを知っていたとは…  
わかりました直ちによけます」

その後艦載機は着艦し大艦隊は近くの軍港に行つた…

22話・米國海軍 vs 帝國海軍ー? (後書き)

皆様の「」感想お待ちしております

最終回・大和帝國へ

軍港 -

「…なるほど…そういうわけですか」

「文明レベルのひくいこの世界にただひとつずば抜けた国がある理由がわかりました。

木下中将と高野と名乗る軍人は親しげに話していた。  
一方濱口は…

「…」

「コンコンッ

「ん？ 誰だ？」

ガチャ…

「健介…」

「タバサか どうした？」

「寂しい」

「ちょ…甘えつ子だなタバサは」

「うん、いいでしょ」

「いいよ

「健介？」

「なんだ？」

「大和帝國に行つたらどうする？」

「元の世界に返れるなら戻るさ」

「私も…行つていい？」

「国のことは姉に任せたんだろ？ 別に問題はないと思つよ」

「ありがと…」

「おやすみ、健介」

「ああ、おやすみ」

バタン…

(船旅にもいい加減つかれてきた…もうすこしで大和帝國だな)

翌日 -

再び出航…大和帝國海軍へは連絡がいきどどいたらしい。  
誰が普及させたか大和帝國には電話まであるという。

そして…

9月も末、ゆっくりとした旅は終わらつとしていた。

帝都「大和」へと到着「大和」とは東京がある所にある都らしい。

船から出ると…

「かわつた町」

タバサはうれしそうな顔で言った

それに瀬口は答える

「タバサは」うつとこり始めてだからな

町を歩いていると…なつかしい気分になつた

並木の道路…この木には春になると桜が満開になるらしい。

町は西洋風の建物が並び馬車や車が走っている。

和服と洋服をきた人がいて海をみると築堤の上に小さな蒸気機関車

が走つていた。

町の雰囲気は明治時代といった感じだ。

「きれい…」

タバサはよろこんでいた

「懐かしい感じがする」

「どうして?」

「じつにうかんじの国出身なんだ」

「そりなんだ、大日本帝國つてこりんな感じの国なんだ」

一方陸軍は…

「すつげええええ」

「鉄の馬だ…」

「！」…こしが抜けた…」

「おい！ 大和の飛行機より早くとんでるぞー。」

「あわわわわ…」

街中を戦車で走行し上空には陸軍航空隊の飛行機を飛ばしていた為  
大和帝國の国民からめずらしがられていた。

国会議事堂前 -

ここで陸海軍が合流した。

議事堂前には滑走路がありそこには航空機はおりぬ…

「…そのまんまだ…日本のそのまんまだ…」

タツタツタ…

「よつこそ大和帝國へ」

「えつ？」

「私は大和帝國第十代内閣總理大臣三田村萩尾と申します」

「はつ 私は大日本帝國陸軍トム島守備隊總司令官石原宗一郎でござります！」

「では…」

「よし、ここからは私一人で行く、ほかの者は5時までにここに集  
合すること、  
では一時解散！」

「はい！」

タツタツタツ…

その後石原達は首相官邸へと移動した。

「さて…あなた方の目的は現実世界に戻る…ということですね」

「ええ、何故ご存知で？」

「何度か過去にそういう人たちがきています」

「そうなのですか？ それで戻れた人は？」

「誰一人といません、帰還は不可能です」

「そ…そんな…」

(折角「こままで」されたといつのは…「われかうじうわねば…」)

一方濱口達は

「二人きりだね」

「ああ」

「初デート…かな?」

「多分な」

「おっ? あれは本場の寿司屋か」

「えつ? 寿司屋?」

「この前のお礼だよ、俺のおじりで食べさせてあげる」

「ありがとう」

寿司屋

「おいしい?」

「うん、ここの赤いのが」

「鮪だよ」

「私これ好きになつた」

「あんまつ食べると通風になるよ」

「つーふー？」

「贅沢病…かな？」

「くえ」

「でもタバサちゃんはまだ若いから大丈夫だよ」

「そうなんだ」

「だから遠慮なく食べてね」

「うん」

そして約束の5時

「…みんな…落ち着いて聞いてほし…」

「…」

「…」

全員が沈黙する

「どうや…帰還は不可能…」

「なつ…なんだつて…？」

「しかし…今更トム島に戻るのも…めんどくさい話だ」  
「何なこともあらうかと血に血を時間を取った、  
どうだ？大和帝國は？」

ほとんどの者は落ち着いたと答えた。

「ならば…しばらぐの間この大和帝國にすまないか？」

「ええー？」

「（）には食糧も沢山ある、燃料もある、  
「工場だってある、これほどの基地は存在しない」  
「どうかね？」

皆意義はなかつた。

（）して日本軍トム島守備隊は「大和特殊戦闘軍」として活動することになり  
国は何故か熱海に基地を造つた。

とある無人島からこの世界に来てから一年とちょっと…元の生活と  
似た「ような生活にもぐれた。

戦闘も経験したが幸いな事に玉碎といつほど死者はでなかつた。

ちなみに大和帝國の正規軍は志願制軍隊であった  
そんな事はどうでもいいけど。

その後 -

濱口は26歳という若さで軍を退役、もう懲りたのだろう  
またタバサが16歳と既に結婚が認められる歳であった為濱口健介  
とタバサは

12月24日、クリスマス・イブに正式に結婚した。  
熱海の山岳部に家を建て退役後すぐに「大和特殊戦闘軍」から零戦  
52型と九七式艦上攻撃機を  
一機もらつたのでガリア兵に1200メートルの滑走路を造らせガ  
リアの魔法使いに  
固定化の魔法をかけさせた。

ミタは隊長である濱口が退役したので新たに戦闘309飛行隊の隊  
長になった。

ディートリヒ・ケンペル少佐は熱海にある軍需工場の総責任者になり  
兵器の大量生産を行えるようにした。

ジョン・ゲンガー大佐は独自に「在大和特別機甲師団」という部隊  
をつくり

国から金をもらい大和の治安維持活動にあたっている。

木下四郎は軍人を引退、第七艦隊は高野中将が指揮をとることにな  
つた。

男たちの戦いは終わった…終戦から1年後に…  
残念ながら亡くなつた方もいたが…  
それでも大半が生き残り…平和な生活を営んでいる

それでいいのだろう

めでたいっぽい

終…と思つたら大間違い！ 続きがあつたりなかつたり  
とにかく第一部たるもののはこれで完…

## 最終回・大和帝國へ（後書き）

「愛読ありがとうございます。  
外伝やら続きやら  
またこれとは別な話を書いたりするんで以後もよろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1650h/>

---

あゝ皇国の零

2010年10月10日10時20分発行